
タイムトラベルママ

イツミン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タイムトラベルママ

【Nコード】

N6180F

【作者名】

イツミン

【あらすじ】

37歳一児の母である井原葵は時間跳躍者、通称トラベラーだ。彼女は自在に過去に跳躍し、過去の改変から現在を守っている。トラベラーはいわゆる世界中のヒーローで……。ただし、井原葵、このタイムトラベルママは……凶暴につき。

カンバックママ 序

トラベラーって言葉がある。二十一世紀初頭の辞書を開けば、「旅行者」と説明されている言葉だ。

だけど、今は違う。

今現在、辞書でトラベラーを引いてみると、旅行者って意味の上に「2」と書いてあるのが、誰でも確認できるはずだ。

そう、旅行者なんて、二番目の意味に過ぎない。

いの一番に書いてあるトラベラーの意味は、「時間跳躍者」。

タイムトンネルの存在が確認され、タイムトラベルが現実のものとなって幾星霜。普通じゃ機械装置を駆使して初めて可能になる時間跳躍を、その身一つでやってのける存在。それがつまりトラベラー。

2

トラベラーは希少な存在で、トラベラーというだけで、食べていくには一生困らない。

時間跳躍は過去の改ざんに繋がるので違法行為になっているのだけど、官公庁なんかでは特別権限で時間遡行が必要になるので、トラベラーは世界中どこをとっても引く手数多だからだ。

トラベラーでなければ時間遡行できないというわけではもちろん無いのだけど、トラベルマシン（タイムマシンのことをこうやって呼ぶことは、誰だって知ってるよね？）を使わなければ過去に戻れず、また異時間に耐性の無い普通人よりも、トラベラーは利便性がずっと高いのである。

普通人が異時間に長く触れていると、すぐに分解症（致死率10

0%なんだって)になっちゃうからね。

そういうワケで、生まれながらに就職先が決定し、しかもお金のたくさんもらえるトラベラーは、全人類の尊敬の対象だ。

だからって私は、あんまりそういう気持ちになれないけど。

だって、身近にいるトラベラーが、あんまりだらしないのだから。

私の名前は伊原紗枝。

十四歳の中学生で、近所では評判の「よく出来た子」だ。

だけど母親がどうにも不出来で……。

そう、あんまりだらしない身近なトラベラーってのは、私のママ、井原葵のことだ。

これはそんなママの、タイムトラベルの話。

カンバックママ01

ドンドンドン。

ドアをノックする音がする。

僕はそれを無視する。

今日も、僕は無視をする。

締め切られたカーテンの隙間から覗いた光は純潔な朝陽で、暖かなそれは、外へ外へと、僕をいざなう。

ドアをノックするその人も、僕を外へと、連れ出そうとしている。

でも僕はその全てを塞いで、狭い狭い部屋の中、一人きりでひざを抱える。

たった一人、狭い部屋の中でひざを抱える。

僕は……それでよかった。

それでよかったと……思っていた。

月日は過ぎ去り、やがて僕は思い知る。

本当は何一つ、よくなんてなかったことを。

それは遅すぎた覚醒で……。

だからって僕は、諦めることなど、出来なかった。

暗闇の中。

手探りで、手探りで、少しずつ進む。

光が見えるまでにかかった時間は……。

あまりにも長い時間で、そして、一瞬だった。

1

冬 秋 夏 春

季節が次々と変わっていく。

世界はちっぽけな人間一人が立ち止まっていたって、お構いなしに回る。

僕はそんな置いてけぼりの、ちっぽけな人間の中の一人だった。

何で、こんなことになったのか。

誰か説明してくれる人がいるのなら、僕は聞きたい。

あいつらは、何で僕を標的にしたんだ？

中学校に入学して、間もないときのこと。

兵藤と中川という、体のかい二人のタチの悪い生徒が居た。そいつらはずっと昔から不良だったらしく、中学入学と同時に二人つるみだし、そして毎日獲物を探していた。

僕はやつらに捕まった。

何でなのか、まったくわからない。

ただクラスが同じで、僕は男子の中で一番小柄で、すこし無口な生徒で……。

たったそれだけで、やつらにしてみれば格好の餌食だったのかも
しれない。

弱そうなやつだから、小突き回してやろうと、ただそれだけだったのかもしれない。

そしてひょっとして、もっと大きな理由があったかも知れず……。もしかしたらもっと単純に、ただ目に付いただけだったのかも知れず……。

暗転。

僕の人生は地に落ちた。

はるか上空とも思える高所から二人は僕を見下ろし、冷笑を浴び

せかけた。

殴られることや蹴られることなんかは日常茶飯事だった。

毎日毎日、僕は兵藤と中川という、二人の不良の餌食だったのだ。

クラスの中で、僕を含めた三人は「透明な存在」になっていた。

手助けが来ることなぞまったく期待できず、誰もが目を逸らすどころか、最初からこちらを見てやしない。

教師だって、僕のことを見捨てていた。

一度だけ注意したことがあったけど、なんと言っただかといえば、朝のHRで

「いじめはやめましょう」

なんて小声で言っただけだ。

そんなことでいじめが止まるなら、毎年のように聞くいじめ自殺や報復殺人なんか、人類史上に存在しなかっただろう。

おびえきった教師の一言は火に油。

クラス内で唯一の「大人」すら手出しできないと知り、やつらは増長し、僕は体中にあざを作ることになった。

入学から4ヶ月。

中学校生活初めての夏休みに入り……。

僕にはそこから先の、学校生活の思い出がない。

中学校。

高等学校。

大学。

華々しさに満ちたスクールライフは、僕には来なかったんだ。

青春？

辞書の意味のところに、一つ書き添えてくれればいい。

結城重幸には来なかったと。

カンバックママ02

2

十三年前のあの日。

僕が思っていたことは、部屋にテレビがあつてよかった、だった。中学校最初の夏休みと同時に始まった、僕のひきこもり生活。移ろう世界から隔絶されて僕は、一人自分だけの世界に没頭した。テレビを日がな一日眺め、網膜に次々と変化する光を焼付け、内向的な世界に没頭する。テレビは形だけの変化を与えるのみだったけど、それだけでも、部屋にあつてよかったと思つた。

考えることは何か？

単純明快。

いじめ被害者のご多分に漏れず、僕だって自殺や復讐のことしか、考えていなかった。

人が死ぬには、どれが一番楽なのか。

首吊り。

リストカット。

飛び降り。

入水。

有名どころの自殺方法を頭の中で列挙し、そして次々否定していく。

どれをとっても痛いし、苦しいし、辛いし、やっぱり死にたくない。

それなら、どうやって復讐するのが、一番効果的なのか。

……僕には、思いつかなかった。

いや、思いつくのとだけけど、一つに絞れなかった。

だってどの方法も、やつらが苦しんで、苦しんで、苦しんで苦しんで苦しんで死ぬには、一度殺したんじゃ到底追いつかなかったからだ。

入学当初の集合写真。

兵藤と中川の顔のところに何重にもバツを書き、ナイフで突き刺し、突き刺し、突き刺す。

ノートを開いて日記を書けば、「殺す」と「怨み」の字しか出てこない。

毎日そんな風に、過ぎていく。
そんなだけが、僕の生活。

ドンドンドンと、時折響くノックの音。

外へいざなうその音を、僕は背後に聞いて全て無視をし……。

その頃僕は

暗転した暗闇の世界から

さらに深く落ちるなどと

知る由もなく――

誰か知っているなら教えてほしかった。

だから僕は、取り戻すために光をつかんだ。

結城重幸二十六歳。

その日彼は、十年前の過去へと跳んだ。

カンバックママ03

3

ちゅんちゅんちちと、どこかで鳥が鳴いている。

朗らかな陽気の、日曜日のお昼過ぎ。

狭い狭い都市型住宅の、申し訳程度の庭に面した六畳の和室のテーブルを挟んで、向かい合って座る男と女。

女の名前は井原葵。三十七歳一児の母。

男の名前は浦沢俊介。五十四歳一児の母の父。

テーブルの上には、ちゃんと一つ菓子折りが載っかっている。

「これなんですか？局長」

「見ての通りの手土産だ。通りがかりのデパートで一番高いものを買ってきた」

仏頂面の浦沢は、過去の改ざんと日夜戦う時間管理局の局長。地方都市に配置された支局勤めとはいえ、てっぺんにドンと座った偉いさんだ。

二人の関係は上司と元部下。

詳しく説明すれば、「時間調停者」と「調停指揮官」の関係。

過去の改変に際し、実際に過去に行つて歴史の変異と対峙するのが時間調停者で、そのときの作戦指示を行うのが調停指揮官である。

「なんでまたこんなものを」

つつつんと、葵は菓子折りをつつく。本当ならそんな失礼なことをするもんじゃないんだけど、この人そんなことはまったく気にしないのである。

「頼みごとをするのに手土産も無しというのでは礼節を欠くだろう」

「頼みごと。なんですかねえ」

「察しはついているのではないか？」

「よくわかんないです。特技も何も無い一介の主婦ですんで」

浦沢は四角い顔の真ん中にしわを寄せ、そわそわと視線をさまよわせる。対して葵はニコニコ笑顔だ。

この二人、実は折り合いが悪い……とかではない。

まったくない。

全然ない。

過去二十数年遡っても、仲の悪かったことなど一度もない。

葵が結婚したとき、仲人を務めたのが浦沢だったといえば、関係のよさがよくわかる。

……あまりよくわからないかもしれない。

浦沢が浮かない顔なのはただ単に、頼みごとがつまり、頼みづらいということなのである。ところが葵にしてみれば「今か今か、まだか、まだ来ねえのか」って具合に浦沢の来訪を待っていたので、そこで笑顔と仏頂面のツートンカラーが完成するわけだ。

「……茶は出らんのかね？」

沈黙至極。

あんまり気まずいもので、浦沢は喉が渴いてきていた。

「出ません。めんどくさいです」

きつぱりと切って捨てる専業主婦。

こういう人なのだ、井原葵は。

旦那様が海外出張でめったに家に居ないせいか、家事は手抜きがまかり通り、食事は外食、洗濯は三日に一度、掃除はほっときや娘がするといった有様だった。

と……。

「出ますっ」

すらっとふすまが開いて、盆に湯気の上がる湯飲みを一つ載せた少女が室内に入ってきた。

伊原紗枝十四歳、掃除が得意な井原葵の一人娘。

背え高ノツポで、モデルみたいに張り出したバストに細いウエスト、悩ましげなヒップラインと三種の神器をこれでもかと揃えた母からその特徴を大いに遺伝……しなかった葵自慢の一人娘である。似ている箇所を上げれば顔立ちだけ。

背は低いし、すつとんとした出るとこ出でない幼児体型（意外と需要は多いぞ！）だし、性格だって母親に似ず真面目一徹。良くも悪くも悪くも全然似てないのだ。

そんなもって実はぱつと見美少年にも見られてしまう外見にコンプレックスを抱き、少しでも女らしくと一所懸命に髪を伸ばしたりしている。なんともいじらしい。

母親はそんなことまったく気にせず、

「女の魅力は後から勝手にについてくんのよ」

と短く髪を切っちゃっているのだが、葵は少しくらい娘の気持ちを汲んでやるべきである。

でないときつと、いつか後ろから殴られる。

「ありがとう紗枝ちゃん」

「ママのじゃないよ」

ひょいと盆の上の湯飲みに葵が手を出すと、紗枝は軽やかな動作で盆を頭上に掲げた。出来た娘がお客を差し置いて、無精な母親にわざわざ茶を淹れるわけがないのである。

つつけんどんに言い放ち、紗枝はテーブルの脇に膝をついて座ると、浦沢の前に両手で支えた湯飲みを置いた。

「お客様がいらしたのに、お茶もお出ししないなんて私が許しません」

人に出された茶を指くわえてみる母親をジロリとにらむ娘。だって子供として、母親にはあんまりだらしない姿を見られたくはないのである。

最早隠しようもないんだけど。

それでも紗枝はこの子供みたいな母親のことが大好きで、結局のところだらしないところもわがままも全部許してしまうのであ

た。

(ハア…)

胸の中でため息ついて、紗枝は浦沢に頭を下げて部屋を出て行く。
「いい娘さんじゃないか」

「あたしの躰がよかつたんですよー」

えへへへと葵は笑う。

絶対そんなわけがないのだけど、浦沢はあえて言わないでおいた。

「で、頼みってなんです」

「うん、その…な」

ぐるんとターンして卓上に戻ってくるさっきまでの話題。

浦沢は言葉を濁した。

何度もいうようだが、言い辛い頼みなのである。

浦沢は気を落ち着けるため、湯飲みを取って茶を一口すすった。

緑茶は程よい温度で飲みやすく、なるほどよく出来た子だと、浦沢は自分の中で紗枝のことを再び評した。そして目の前の葵を見て、
「この母からあの子が？」とげんなりする。確信することは、「反面教師としては優秀に違いない」ということだった。

浦沢は一つ息をついた。

意を決し、言う。

「一度だけ復職してくれ」

「ヤです」

意を決した一言は、発言後わずか0.1秒の間もなくあっさりと
ケられた。いや、葵の拒否は若干言葉尻にかかったたような気も…

…。

「一度だけでいいんだ」

「ヤですね」

「君は復職したがってただらう？」

「でもヤです」

「引退したくないと何度もゴネてたのにか？」

「そうですねえ。あたしは何度も『捨てないで』って言ったんです

けどねえ。それなのに、ミソジ過ぎたからって、局長は若いムスメに入れ込んでしまったんですよえ……」

「人聞きの悪いことを言うな」

もちろん事実無根である。

ていうかそもそも当時の時間管理局に若いムスメなんぞ居なかった。とか言うのと怒りだす人がいるので、一人居たということにしておく。もちろん伊原葵その人だ。

「いやねえ、アレだけ無理やり辞めさしといて、一度きり復帰しろなんてねえ……」

わざとらしく眉根をよせ、ふりふりかぶりを振る葵。言外に「虫が良すぎやしませんか？旦那」と言っていた。

「……何が言いたいんだ？」

浦沢は先を促した。

言いたいことは、すでにわかったようなものだったが……。

「だからあ……」

葵は勿体つけて一拍おき、

「一度だけじゃ嫌なんですよ」

意地の悪い顔で笑った。

お互いわがまま言い合って、それでトントン。和解成立と行きましよう、てなものである。

「う……」

浦沢は言葉に詰まった。

葵が五年前、引退という形で時間管理局を辞職したのは身体的事由からであり、普通人だろうと葵のようなトラベラーであろうと、時間調停者ならば仕方の無いことである。そのことはしっかりと時間管理局局内規約に明記されており、葵にも入局時から知らされていたことだった。

が、時間調停者の仕事が大好きだった葵は、引退を拒否し続けたのだ。

「なんですかその規約は！そんなのあたしが無かったことにしてや

りますよ！」

と、時間調停者自らが過去の改ざんを宣言したほどだった。そしてなんと、実際「なかったこと」にしようと、時間管理局の正確な発足日時まで調べていやがったのだ。

そこをなんとかかんとか説得し、しぶしぶながら葵を引退させたのが、ほかならぬ浦沢俊介なのだった。

だからこそ、浦沢はこの「一度きりの復帰」を、頼みに来たくなかったのである。

自分で「辞めてくれ」と言っておいて復職しろだとか……。そんなこと言い辛いし、言ったら言ったで、どうせ無茶苦茶なことを言い出すに決まっている。

想像に難くないことであり、また、そのとおりになってしまっていた。

「いやーどうしようね？こんなオイボレのところに頭下げに来たんですから、すごい大変なんでしょうね。どうしようね？」

葵は嬉しそうに言うのである。

浦沢は鼻の頭をかいた。

まったく、どうしようもないオテンバだ。

いや、オテンバとは少女時代に使う言葉であり、この場合当てはまらないか……。

「はあ……」

浦沢は大仰に、ため息をついた。

なんとも情けないことに、葵の言うとおり「すごい大変」なことになるのだった。

時間調停者は、じつは凄い少数である。

ヘタすれば調停者が過去を変えてしまう事態にならないとも限ら

ないので、試験に試験を重ね、人間的にも能力的にも優れた人材が集められる。だからその弊害として、人員は随時枯渇しているのだ。例外として審査なしで登用されるのは葵のようなトラベラーだけだ。

そして今現在。

浦沢が局長を務める支局は事件を抱えてるにもかかわらず、出勤できる人材が居ないのだった。支局に戻れば、壁に貼りついた出勤管理表の「時間調停者」の名前全てに「出勤中」の札が下がってるのである。

他の支局から人材を派遣してもらうことも出来るのだが、それは凄い時間がかかり、早くても明日にしか人材は用意できない。

ちなみにそれがどんな手順かというと、まず浦沢の支局で「調停者派遣要請書」を書き、局長、副局長、現場管理官の捺印を貰い、それをファックスで東京本局に送り、本当に危急の事態であるかを審査し、同じ書状に同じ肩書きの人間が捺印をし、要請のあった支局の近隣の支局に書状が送られ討議が行われ、派遣可能ならばそこで初めて調停者の派遣が決まるのである。

ついでにいうと、依頼先が派遣できなかったら、また最初からやり直しとなる。その上手続きは午後五時までしか受け付けてもらえない。なんという官公庁、面倒臭いったらない。

当然事態は待っちゃくれないわけで……。

そこで浦沢は近隣に緊急的に出勤を要請できる人員を探り、そして伊原葵その人に白羽の矢が立ったのである。いやむしろ、矢が狙うべき標的は葵一人しか居なかったといえる。

ここで迷うべきかと、浦沢は逡巡する。

さっさとイエスと言って、事件に対処してもらうべきではないかと。

頭を下げるべき人間が、目の前に居るだけでもいいことだ。もし

かすると、書状をたらいまわしにして、明日まで待つ羽目になっていたかもしれないのである。

「わかった。その代わり、一年間だ。一年だけ、復職を許す」
渋々ながらも、承諾するしか浦沢にはなかったのだった。

カンバックママ04

4

ジワジワと蝉が鳴いている。

今は四月も中頃で、蝉が鳴くにははやいだろうといったもんであるが、実はここで蝉が鳴いているのには理由があるのである。

ここはそう、四月であって四月でない。

わかりやすく言うと、井原葵ただ一人七月初頭にいたのだった。

井原葵は時間跳躍をし、十年前の過去に跳んだのである。

葵にとって「今」は、十年前の七月四日なのだ。

「十年前っていつても変わらないな」。車が空を飛んでると思ったのに」

真っ青な空を仰ぎ、葵は感慨深げに言った。

『そんなもの、当然だろう。現在だって飛んでいないものが、十年前に飛んでいるわけがない。そもそも、君はその時代を良く知ってるじゃないか』

耳につけたインカムから、局長・浦沢の声が響く。現在と過去を繋ぎ会話が出来る、便利なインカムだ。

「冗談じゃないですか。ノリ悪いですよ」

『すまん、悪かった』

ため息混じりに浦沢は言った。

悪かったなどと別に思っていないが、葵と付き合っていくにはノリをあわせるのは重要なファクターだからだ。

「それで、容疑者のナントカさんはどこに居るんです?」

十年前の繁華街を歩きながら、葵は聞いた。

今も十年前も、街の様子あまり変わっていなかった。しいていうなら、少しばかり型遅れの服装が目立つくらいだ。葵は「十年後」から来ているが、ノースリーブシャツにジーンズ、ミュールに帽子、そしてサングラスといったいつの時代にも居そうな服装なので、人ごみにまぎれても違和感はない。

もつとも、あまりにぎわった街ではないので、人出はそんなに多くないのだが。

『結城重幸、だ。年齢は二十六歳。おそらく彼は羽室坂高校に行くつもりだろう』

「おバカさんガツコですね」

『君が言うかね？』

「あ、酷いですよそれ。確かにあたしバカですけどねー」
小さくぷーっとむくれる葵。

この人は本当に一児の母である。子供っばいけど、一児の母である。

羽室坂高校は葵の居る〇市の繁華街から電車で二駅の所にある。

葵はとりあえず、駅に向かうことにした。

「で、なんでハムコーなんです？」

ハムコーは羽室坂高校の愛称だ。響きとしては凄く美味しそうなので困る。

『十三年前、君の居るときよりさらに三年前だが、彼はいじめにあっていたな。それから今に至るまで十三年間ひきこもり生活なんだが、彼をいじめた二人、兵藤浩介と中川純一が羽室坂高校に通っている。それでおそらく、そこに行っただろう、と推定した』

「はあ、復讐でもするつもりなんですかね？」

『おそらくそうだ』

「彼はアレ、トラベルマシンで跳んだんですよね？」

『ああ。彼の自室には小型のトラベルマシンがあった。どうも自作のようだな。彼の両親も、結城がそんなものを造っていることは知らなかったようだ』

「トラベルマシンを自作ですか？」

トラベルマシンは過去の改ざんを禁止しているから、製造方法は法律によって伏せられている。それを一人で作り上げるとなると、結城重幸の技術力とはとてもない。

「すごいですね……。可能なんですか？それ」

『結城は実際ソレで跳んだんだ。可能だったんだろう。それに、部屋中怨み言書き連ねたノートが散乱していたからな、よほどの執念だったのだろう』

横断歩道の前。信号が赤だったため、葵は立ち止まる。

目の前では、ごうごうと音を立てて車が走っていく。

いじめ問題は、過去も現在も、後を絶たない。

誰かが誰かを殴り、傷つける。

誰かが誰かに殴られ、傷つけられる。

そこに理由があるのかないのか、人は人を傷つける。

葵は奔放な人間で、どの集団に属しても浮いていたが、どんな人間とも仲良く過ごしてきたせいか、いじめられた経験はない。

だから葵には、いじめる人間の心境も、いじめられる人間の心境もわからない。

過去に戻ってまで復讐を成そうという人間は、一体どういった考え方を持っているのか……。

「なんですかね？いじめって」

葵はポツリとつぶやいた。

『わからんさ、そんなもんは。俺だって何度も考えたことがあるが、あれはきつと、答えの出てくるところではないのだろう』

信号が青に変わり、葵は歩を進める。

同じようにして信号待ちをしていた人間たちも、同じように歩き出した。

横断歩道の両の岸から、人々が目指す対岸へと歩いていく。数を見れば、二十名ほど。

一人一人を捕まえて「いじめをしたことがありますか？」と問えば、誰か一人はイエスと返事をしそうである。

いじめとは身近に潜んだ恐怖だ。

「あたしならいじめて来たやつなんか社会的に抹殺するんですけどねえ」

目指す駅へと歩きながら、葵は言った。

とんでもない冗談を、サラっと言いやがるもんである。そういうことは、多分あんまり言わないほうがいい。

『君がそういうことを言う……怖いな……』

葵にはトラベラー能力を使ってそういうことが本当に出来る上に、実行しちやえる行動力まで併せ持っているので、とてもじゃないが困ったもんである。

まあ、実際にはやってないだろうけど。

もしかしたら実際にやっちゃったことがあるかもしれないけれど……。

「ま、そんなことはどうでもいいですかっ」

あっけらかんと言う葵に、

『そ、そうだな、どうでもいいな』

未解決の時間跳躍事件が無かったかどうか、調べてみようと思う浦沢であった。

それは結局、実行されずに終わるのだが。

実行されなかった理由はもちろん、「本当にやっちゃってたらど

うしよう」という恐怖感からであったが、それが井原葵ご本人様に
明かされることは一生ない。

カンバックママ05

5

十年前、七月四日。

時刻は午後四時過ぎ。

「さてーと、参りましたよっと」

葵はハムコーこと、羽室坂高等学校にやってきていた。

羽室坂高校はどこにでもあるような、まるで高等学校のステレオタイプといった佇まいだった。

しかしながら、大多数の高校と少し違うところは……。

「いやまあ、こりや本当にスゴ異ところですよ、局長」

下校時間になり、家路を急ぐ生徒たちが皆、いわゆる優等生とは間逆な人間たちばかりなのである。

『むかしから「誰でも入れる学校」として有名だったからな』

「局長にも見せたげたかったですね。どこを向いても悪そーなコばっかりですよ」

『見たいとも思わんよ』

「そりやそーですなえ」

局長はインカムで連絡してもらってるだけなので、映像なんぞはまったく届いていないのである。なので、井原葵による実況生中継で自分の中に映像を思い浮かべるしかないのだ。

「で、部外者つて入っちゃっていいもんなんですかね？」

校門のまん前でデーンと構えて、葵は首をかしげた。

生徒たちは男子も女子も、突然現れた長身の女をジロジロ見ながら、怪訝そうな顔で去っていく。中にはあからさまに眉を吊り上げ、

「文句あるのか？」と難癖つけてきているような顔の生徒も居たが、葵はそんなこと別に動じないので、彼らも結局ただただ通り過ぎていった。

『要件をすぐに済ませれば、問題ないだろう。悪そうな生徒に声をかけてみる。兵藤も中川も不良だ、それですぐにわかるはずだ』

「全部悪そうですけど」

『…特に悪そうなやつだ』

「了解しましたー」

ハンチングにサングラスの場違いな女が一人、高校敷地内へとテクテク歩いていく。

葵はキヨロキヨロと視線をめぐらせ、「特に悪そうなやつ」を探した。

と、どこからどう見ても不良だといった感じの、タバコを吹かしたスキンヘッドの男子生徒を葵は見つけた。

こいつは悪そうだ。

特に悪そうだ。

プロレス技もたくさん知ってそうだ。

ちなみに不良生徒は人にプロレス技をかけたがるもんだというのが、葵の自論である。

「ちよつとあんだ」

何の躊躇も無く、スタスタとスキンヘッドに近寄り、葵は声をかけた。

「ああ!？」

顔中の筋肉をこれでもかと動かし、スキンヘッドは葵を威嚇にかかる。

が、葵はそんなことじゃ全く動じない。

逆に「不良だなんだといっておいて、結局おしまいまで授業に出てんだから半端よね」と、見下ろしちゃったりしてるのであった。

「ヒョードーコースケってのと、ナカガワジュンイチっての、ここに居るか知らない？」

『もつと聞き方に気をつけるとか無いのか、君は……』
浦沢はあきれ果てていた。

人に物を聞くときは、礼節を重んじるものだという常識は葵にはない。目の前の（多分）不良生徒にもそんな常識はありそうにないので、全く問題ないかもしれないが。

「兵藤？ 知るかよ、どうせ体育館裏だろ」

知るかと言っておきながら、スキンヘッドはきっちり答えて去っていく。

いきなり見知らぬ女から上目線の言葉を投げかけられてすっかり答えるあたり、彼は実はいいやつなのかもしれない。

「あらまあ……」

『どうした？』

「体育館裏らしいですよ？ 絶滅危惧種の不良じゃないですかね？」
不良は体育館裏でタバコ吸って教師の悪口を言う。

いつの時代からの不良像かは定かじゃないが、新世紀の今となっちゃ、めったに見ないタイプなのは間違いない。

「あんたらねえ、ホント、いつの時代の不良よ。十年前でも居ないわ、こんなの……」

体育館裏にやってきて、葵は開口一番そう言った。

葵にとって「今」は十年前なので、十年前には居ることになるのだが、彼女にはそんなこと関係ない。

葵の目線をたどれば、タバコの吸殻を中心に車座にいわゆる「うんこ座り」をした三人の不良生徒が。

兵藤に中川、あとその他一名。

過去に跳ぶ前に写真で見ていたので、青いには表どうも中川もすぐにわかった。

『結城のことを聞くんた。無事で居るところを見ると、まだ来てい

ないようだがな』

「あいさー」

小声で返事をする葵。

と、

「なんだお前。なんか用かよ？」

大仰に煙を吐きながら、兵藤が立ち上がった。

身長百八十センチを突破しているだろう兵藤は、女性にしては長身である葵を十センチほど上回っていて、威圧的だ。

「ヒョードーコースケ、ナカガワジュンイチ」

名前を呼び、二人を指差す葵。

「ああ？」

「お前なんだよ」

中川と、その他一名も立ち上がった。中川も兵藤と同じくらいに背が高い。もう一人は葵と同じくらいだ。

葵は三人の不良に囲まれることになる。

「あたしは何でもいいの。結城重幸君、来てないかしら？ほら、三年前あんたたちがイジメたコだけどさ」

『だから君は、もっと口の利き方をな…』

何かあつたらと葵の身を案じた浦沢の言葉を、だけど彼女本人は聞く気は全くない。

「とんでもないことになる前に、チャツチャと言ったほうがいいよ？」

三人は顔を見合わせ、なにやら考えている。

たった三年前のことだ。兵藤も中川も、忘れるような遠いことではない。

「チビスケのことじゃねえの？ほら、ヒョーちゃんたちがよく遊んでやってた」

意外なことに、最初に結城のことを口にしたのは「その他一名」だった。どうやら彼も同じ中学の、それも結城のことを知っていることから、一年生時同じクラスだったようだ。

おそらくはいじめを目の当たりにし、兵藤たちの軍門に下った人間なのだろう。

それが断言できるのは、彼が結城のことをいの一番に思い出したからだ。

いじめられる側はいつでも必死だから忘れることはないが、いじめる側は常に遊びであり、その他多くの煩雑な事柄に紛れ込んでしまふものなのである。

すこしだけ、葵はその他一名を睨みつけた。

いじめをいじめとして知っておきながら、被害が及ぶあまり逃げ出し、そしていじめを遊びと言い変えて強者の顔色を窺う。葵みたいな直線的な人間にとって、忌むべき人間だ。

もっとも自身の身の安全を確保することが長く生きるための賢い選択であり、間違っているとは葵も思わないが。

ただ「気に入らない」とは思うが。

「あーあれか。チビスケとはもう遊んでやってねえぜ」

「あいつよお、俺たちがせっかく遊んでやったのに、なんだかしらねえけど学校来なくなつてよ。俺たちがいじめたんじゃねえかって言われたんだぜ？ひでえよな？」

中川が言つて、兵藤が続いた。

「そうだよね、アレは酷いよ」

呼びかけられた形になり、もう一人が追従した。彼はこうやって小さい逃げ道をいくつも用意して生きてきたのだろう。

「で、アイツが何？ずっとあつてねえけど、それがなんなの？オ・バ・サ・ン」

中川がや二臭い顔を近づけて笑った。

葵は額に一筋、血管が浮き出るのをなんとなく感じた。つまりムカつときた。

オバサン？

言うに事欠いてオバサン？

それもわざわざ一文字一文字区切って、言い聞かせるようにオバ・サ・ン？

不良ってのは、学業に脳みそ使っていない代わりに、人をムカつかせることにはアイディアがフル回転すんのだろうか？

ババアって言われるなら、多分ここまで葵はムカつかない。

だって、不良は誰に対してもババアというものである。お母さんにも、お姉さんにも、女性教諭にも。

だけど、オバサンとは誰もが使う言葉で、しかも年齢を感じさせる言葉だ。

若い女性には決して使わない言葉なのである。

『まだ来ていないか。葵君、校門前にバーガーショップがあったろう？そこに入ろう。そこなら人の出入りがよく見えるだろう』

浦沢は次の指示を出したが、能面のような笑顔に額に血管を浮き立たせた葵には、そんなことは届いていなかった。

『聞いているか？バーガー屋なら結城が来てもすぐに…』

「局長」

『ん？なんだ？』

「例えば今日の前に居る三人に、記録にない怪我が出来たとして、『現在』に影響って出ますかね？」

『あんまり大怪我だとわからんが、おそらく影響はないだろう』

「そうですか……」

葵は笑顔を張り付かせたまま、眼前の三人を見回した。

「よかったね、あんたたち。大怪我はしないで済みそうよ？」

葵はグリッと、握りこぶしを固めた。

『……待つんだ葵君』

浦沢の制止も、遠く十年の時間を隔てては効き目はない。

『君！落ち着くんだ！葵君！』

シェイプアップにボクシングを選択し、日々鍛錬を怠らない葵の凶器に準ずる拳が彼らを襲ったのは……もはや言うまでもない。

カンバックママ06

6

「やっぱりね、あたし変だと思うんですよ」

羽室坂高校の校門前のバーガーショップ。

校門がよく見える窓際のカウンター席に腰をすえて、ハンバーガーセットをつつきながら葵は言った。

『何がだ？』

『いやね……』

ポテトを一本取り上げ、口に運ぶ。

「十三年前のいじめの復讐に十年前に来るって、おかしいじゃないですか。だって、いじめられた後ですよ？彼はもう三年もひきこもってるんですよ？いじめられる前に何とかしちやわないと、結城君のこれからって変わらないじゃないですか」

『ふむ、確かにそうだな』

「そりゃね、いじめられた人ってずっと復讐心って忘れないと思うんですよ。でも、事が終わった後にわざわざ跳ぶんなら、現在でやつちやえばいいじゃんってハナシですよ。なんか他にある気がしません？」

葵はするするコーラをすすった。

陽は暮れだし、校門から吐き出される生徒の数も減っている。今や学校内に残っている生徒たちは部活生のみで、あとは教師が数名残っているくらいである。

兵藤や中川も、一時間ほど前に帰宅する姿を、葵は見ている。結城が二人の自宅を知っているとは考えにくかったので、葵はこうして校門の監視を続けているが……。

「これ、多分無意味ですよ。そもそも、結城君ってのは、アホ二人

がハムコーに通ってるって知ってんですか？」

葵の中で兵藤と中川はアホに成り下がっていた。今度二度と、彼らは名前を呼んではもらえないだろう。

『彼の部屋からは兵藤と中川に対する怨み言を書き連ねた日記しかみつけれなかったのな、復讐心に捕らわれているとしか考えなかった。』

「もっと調べたほうがよかったですって、絶対」

『しかしそうは言ってもな、部屋の有様を見たら、君だってきつとそう思ったと思うぞ？』

「たしかにあたしは部屋を見てないですからね。でも、こうも考えられません？結城シゲキは確かに……」

『重幸だ。結城重幸』

「そう、結城重幸は最初の三年間は確かに復讐心を持ってひきこもっていた。だけど何かがあって、彼はトラベルマシンが必要になった。結城君はトラベルマシンを作ることとその後の十年をささげ、そして今に至った。だから彼の部屋自体は、十年前の状態のままで止まっている。だから傍目には復讐のためにトラベルマシンが作られたように見える。そうは考えられないですか？」

『ふむ……』

浦沢は押し黙る。

なるほど葵の言うことには一理あった。

怨み言の書かれた日記と、トラベルマシンの製造が、同時進行だったとは限らないのだ。日記には途中から日付がついていなかったから、いつまでの日記だと断定することは不可能だが、途中で日記を捨て、トラベルマシンの制作に没頭したと考えることも、確かにできる。

そしてそう考えるなら、確かにターニングポイントは十年前の七月なのだろう。

『わかった、調べてみよう。君は引き続き、見張りを続けてくれ』
「わかりました。あ、日付が変わったら寝てもいいですよね？」

『ああ、構わん。結城も動かんだろうしな。小さいが近くにビジネスホテルがあるはずだ。そこに泊まるといい』

「豪華なホテルがいいです。蟹食いたいです」

『贅沢を言っな。それに、蟹は季節が違う。大体君はバーガーを食べただろう？』

「あ、そっか。満足しときます」

葵はぺろつと舌を出す。

時間調停者は現場に赴き、指揮官に従って動くだけなので食事等も取る暇が多いが、指揮官は指示をする前にも調査や作戦立案などがあり、食事を摂る時間がないこともある。

現在、浦沢は食事を取っていないのだろう。

それと比べれば、ファストフードとはいえ、確かに贅沢なことだった。

十年前時間、七月五日午前七時半。

井原葵は枕元に置いてあった、「現在」連絡用のインカムの呼び出しベルで目が覚めた。寝ぼけ眼をこすりつつ、インカムを装着する。

「あい、なんでしょう」

『君の言うとおりだった。おそらくは結城重幸はコレを目指し、そっちに跳んだものと思う。十年前の七月五日、午後十八時二十四分彼の隣人であり、幼馴染の野添智美が事故で死んでいる。彼女はひきこもり生活にあつた結城を励ましていたそうだ。結城の両親によると、「おそらくは精神的支柱だった」そうだ。彼女のパーソナルデータや事故当日の足取りは端末に送る。結城はおそらく、彼女の行く先に現れるだろう。時間がない、確保を頼む。彼が改変しようという過去はこれに……』

「間違いないでしょうね」

情報を伝える浦沢の声に、葵はどんどん頭が冴えていくのを感じていた。

野添智美の死んだ事故は、十年前時間の十八時二十四分に起こる。

過去を改変させるわけには行かない。

残された時間は、十時間と少しだ。

野添智美、享年十七歳。
結城重幸の幼馴染。
十年前、事故で死亡。

ドンドンドン。
ドアをノックする音が響く。
いや、響いていた。

一年間三六五日休まずに、ドアをノックする音が、毎朝鳴っていた。三年間休まずに、鳴っていた。

でも、十年前の七月五日を境に、それはなくなる。

僕は……。

ずっと、ずっと彼女が、智美が居てくれていると思っていた。
一歳しか年齢は変わらないのに、彼女はとても大人で、そしてずっと、僕を守ってくれるお姉さんだと思っていた。

だけど、暗転した世界の中、事件は僕を闇の中に落としていった。

気がつけば僕は、智美よりも年上になってしまい……。

好きだったのだなあと、今になって思う。
僕は彼女のことを好きだったのだなあ…と。

だからなのだろう。

僕は病院にも会いに行かず、葬式にも出なかった。

本当は病院の前までは行っただけで、ただ、結局死んだ智美には、ついで会わないままだ。

だって、いやじゃないか。

言葉も何も交わさず、勝手に最後だと見切りをつけられては。

だから僕は、彼女に会いに行くことにした。

生きている彼女に、会いに行くことにした。

会って一言想いを告げて……。

今ならば、わかる。

あの日までの僕は、挫けていた。
世界から背を向けていた。

ダメなんだ、そんなんじや。

僕は……立ち上がった。

でも智美、十年間もかかってしまったよ。

カンバックママ09

9

七月五日。

午前七時、智美家を出る。僕の家に行き、僕の部屋の戸を三度叩く。僕は全部無視をする。

午前七時十五分。智美、近くのバス停からバスに乗る。智美の通う高校は、このバスではば直行できる。バスを降りてからの徒歩時間はおよそ十分。

午前八時五分。智美、学校に到着。上岡野女子高等学校、〇県では名門校だ。毎朝同じ時間に僕の部屋に来ていたことを考えると、毎日同じ時間に到着していた模様。HR開始までも二十五分の余裕。智美は真面目な生徒だ。

午後一時丁度。智美、学校から出てくる。今日から期末テストらしい。初めて知った。智美、近くのバス停から〇市繁華街に行くバスに乗る。家とは反対方向。友達と一緒にだから、おそらく昼食を兼ねてテストの憂さ晴らしをするのだらうと思う。

午後一時三十分。智美、街のコーヒーショップへ。食事をここで済ませる模様。僕もお腹が空いたが、同じ店に入るわけにはいかない。近くに他に店はない。我慢することにする。

(…何やってるんだ僕は。これじゃ、まるでたちの悪いストーカーだ)

朝から野添智美を追って回っていた結城重幸は、繁華街の電信柱の陰で、一人ため息をついた。

これから智美が事故に遭う時間まで、およそ五時間。彼はずっと付け回るつもりだった。

彼にとつての、それが最良だったのである。

しかし……。

（これで本当にいいんだろうか？）

彼女への想いと自分の行動を比べ見て、どうにも食違いがあるような気がするのも確かだった。

彼の彼女への想いは、もっと純真で、無垢なものなのだが……。

だからといって結城には、智美を付回す以外に方法が見つからないのも確かだった。

「普通人が異時間に長いこと居ると、体に毒よ」

唐突に声がかけられたのは、結城が何度目かのため息をついたときだった。

驚いて結城は振り返る。

そこにはハンチングにサングラスの、背の高いモデル風の女が立っていた。井原葵だ。

「なんですか、あなたは」

一歩後ずさりながら、結城は言った。

異時間。彼はこの言葉に聞き覚えがある。自分が本来存在すべき時間のことを通常時間といい、時間跳躍して訪れた別時間のことを異時間というのだ。

そして自分に「長く異時間に居るな」と忠告したところを見ると、目の前の女は結城がトラベルしてここいることを知っている。

つまりは、女は、井原葵は結城重幸への追っ手だということだ。

結城は意を決し、身を翻して駆け出した。

今つかまり、「現在」に帰るわけにはいかない。

彼はまだ、目的を達してはいないのだ。

が、駆け出した結城のその手を、葵はがっしとつかんでいた。

「離して！離してください！！」

結城はうめくが、葵は離さない。また振りほどこうとしても、背が高く、鍛え上げている葵につかまれては、小柄な結城にはどうすることも出来なかった。

「ちよっとお話しましょうか、ね？」

時刻は午後二時になった。

場所は智美の入ったコーヒーショップから徒歩五分ほど離れた、寂れた喫茶店だ。ただし智美はもう店を出ている頃だろうが。

壁際の席に追いやられて、結城重幸はうなだれていた。

「もう観念することね。あたしが来たからには、君なんかに過去を改ざんなんてさせないから。怖いおじさんも聞いていることだしね」

葵はコンコンと、指でインカムを叩いてみせる。

「過去の改ざん……？何のことですか？」

「ネタは上がってんの。ま、ゆっくり話しましょ。コーヒーでも飲みながらね」

言って、葵はさつさとホットコーヒーを二つオーダーしてしまう。

「今」が夏だということは全く考えていない。

程なく、無愛想なマスター兼ウェイターが、シュガーとミルクを皿に載せたコーヒーを二つ運んできた。

「僕は……」

「結城重幸二十六歳。〇県〇市武田町三丁目在住。ひきこもり暦十三年。局長言いたいことは？」

『特にない』

「ん、まあそんな感じ」

葵はミルクとシュガーをいれ、コーヒーをかき混ぜた。本音を言えばシュガーはもう一本入りたいが、テーブルにはシュガーポットなどなく、ウェイターに頼むのも面倒くさいので好みの味じゃない

まま飲むことにする。

「僕のこと、調べたんですね」

「ええ、まあ当然。君が野添智美さんを助けに来るだろうってことも、ね」

「……それは違います」

「え？」

「あなたは……」

「井原葵。時間管理局から来た、時間調停者よ」

「井原さんは、僕が彼女を、智美を助けるつもりだと、そう思ってるんですね」

ぐるぐるとかき混ぜられたコーヒーは、ミルクと混ざり、マープル模様を描いてやがて一つの色に落ち着いていく。そして一度混ざったコーヒーとミルクは、二度と分かれることはない。時間もまた同じで、原因と行為から生じた結果は、二度と変わることはない。

結城はゆっくりと、口を開く。

「僕は……智美を助けるつもりはありません」

「……過去に戻ってまで、智美さんを追いかけてきたのに……？」

「はい。僕はただ、彼女に手紙を渡したいだけなんです」

結城はそつと、テーブルの上に小さな封書を置いた。

『何を言ってるんだ？彼は』

「しつ、局長は黙ってください。結城君、どういうことなの？手紙を渡しに來ただけって、そんなこと信じられない。君は十年もかけて、トラベルマシンを作ったんでしょう？それが、目的が手紙を渡すだけ？」

「……そうですね、信じられないと思います。でも、本当なんです」
結城は下を向いて、とつとつと話した。

カップの中のコーヒーが、微細に揺れて波を作る。

「最初は、僕だって智美を助けるつもりでした。でも、たくさん本を読んで、知ったんです」

言葉を区切り、結城は葵を見据えた。

真摯な視線が、葵を射抜く。

「過去の改変を行うと、現在が消滅する恐れがあるんですよね。現在が作り変わった過去とのギャップに耐え切れず、世界は消滅する。そんな説があつて、しかもかなり有力だと、本で読みました」

「局長、それホントですか？」

『本当だ。だからこそ我々が居るのだらう。君は知らなかったのか？』

「大変なことになるとは知ってましたけど、そんな大げさだとは……」
「変わってますね、井原さんは」

くすくすと、結城は笑った。その笑いに、卑しいところはなかった。そして、悟った風な笑いでも、またなかった。

それはただ、「わかった」笑い方だ。

現実には辛く、思い通りにはならない。だけどそれは仕方ないのだから、なるだけがんばって理想を作っていこう。そういう割りきりが出来ている笑いかただ。

葵は確信する。この男は、時間犯罪者なんかではないと。

「手紙を渡したいだけなのね？」

「ええ。僕は智美のことが大好きです。だけど、だからこそ、智美一人の命と世界とを、天秤にかけたりはしません。そんなことすれば、智美に怒られますから。それに……智美はどうも、好きらしいんですよね、この世界が」

小さく沈黙が落ちた。

時間犯罪者は、時間犯罪者などではなく、ただ想い人に会いに来ただけの旅人だった。

時刻は現在二時半。

野添智美の事故死まで、残された時間は四時間を切った。

「でも、もう諦めてます。過去に来たのはいいものの、どうやって手紙を渡そうか、困ってたんです。思いを詰め込んだ手紙を書くことと、トラベルマシンの作ることで精一杯で、手紙を渡す方法まで考えてなくて……。だって、僕が渡すわけにはいかないでしょう？未来から来たって智美にバレちゃいますから……」

「あたしがやってあげる」

気付けば葵は言っていた。

「…え？」

「いいですよ？局長」

『全く君は……。まあ、言うと思っていたがね。そうだな、時間ぎりぎりならば、構わんだろう。野添智美の事故死は午後六時二十四分一時間前……五時二十四分を過ぎたら渡してもいい』

「結城君、いける、やったげる。五時二十四分だから、そうね、三時間後に智美さんに手紙渡してあげる。三時間後っていったら……」

葵は資料を取り出し、智美の足取りを確認した。智美はその時間、百貨店内の書店で参考書を選んでいる最中のはずだ。

「三時間後に本屋さんで、作戦決行。いいよね？」

葵は目を瞬かせる結城にまくし立て、結城のイエスを待たずに決めてしまった。

結城は苦笑して、

「大変ですね、局長さんも」

と言った。

『全くだ。たまらんよ』

「あ、たまらんですって。ムカついた。局長帰ったら絶対叩く。結城君も叩く」

頬を膨らませて、葵はコーヒーを一口すすり、顔をしかめさせると結城の皿からシュガーを奪い取り、自分のコーヒーに入れると一気にあおった。

やっぱり、コーヒーにはシュガーを二本入れるのが最高だ。

カンバックママ10

10

午後五時半。野添智美事故死まで、あと一時間。

智美は資料と寸分の狂いもなく、書店で本を眺め見ていた。
現在は参考書の書架を見ている。

高校二年生の彼女は、大学受験のための参考書買いに本屋に立ち寄っているのだ。

この日に彼女が買った本は調べがついていて、大学受験用の数学と英語の参考書を一冊ずつと、それと中学生用の総合参考書を一冊彼女は買っている。

中学生用の参考書は、おそらく結城の為に購入したのだろう。

書棚の陰から、結城と葵は智美を見ていた。

「井原さん、お願いします」

「んー、そうねえ」

葵はきよろきよろと視線をめぐらせ……。

「局長！電波状態が悪いです！」

『何を言ってる。電波など関係な……』
ブツン。

葵はインカムの電源を切り、そして自分のかぶっていたハンチングを取り上げると結城にかぶせ、結城の背中を思い切り押した。

ドン。

「うわっと！」

突然のことに、つんのめってしまう結城。

「危ないな……」

と、顔を上げたそこに……。

「シゲ君……？」

野添智美が……居た。

「あ、僕、いや、俺は……」

結城は頭が真っ白になった。

何を言っているのやら、全くわからない。

「すいません、人違いでした」

屈託なく、彼女は笑った。

ああ、この笑顔だと、結城は胸が痛くなる。

人懐こくて、優しく、強くて、自分が裏切り続けた……笑顔だと。

「いやだな、私。ちょっと知り合いに似て……。でもこんな小さいんです、そのコ。でも、いやだな、何で見間違っただろ。ずっと気にしてたからかな……」

身振り手振りを交えて、智美は恥ずかしそうに顔を赤らめた。

それにしただって、「こんな小さい」といった智美の手は、智美の腰くらいまでしかない。

智美ちゃん、僕そんなに小さくないよ。

昔の呼び方を思い出して、彼は一瞬そういいそうになった。

唐突に、涙があふれそうになる。

「そのコのこと、凄く大切にしてるんだね」

わざとらしくないように話の流れに乗ろうと、結城はとっさに言った。

すると智美は満面の笑みで、

「はい、私の好きな人なんです」
と言った。

そして途端に、これまでも赤かった顔が余計に赤くなる。

「や、やだ。何でもこんなことまで言っちゃうんだろ。ごめんなさい、変なこと言って。迷惑ですよね……?」

「いいや」

結城は優しく言った。

三年間のノックの理由を、そこに見た気がした。

毎日毎日、休まずに自分を外に誘ってくれた野添智美。

十三年間、気付いていなかった。

なんだ、僕たちはお互いに好きあつてたんだ。

手遅れだったけど、でも、間に合ったよ。

「野添智美さん。そのコも多分、同じ気持ちだと思うよ」

そして結城はポケットに手を入れて、十年かけて書き上げた、何
度となく書き直した手紙を取り出した。

「結城君に頼まれた。君のことが好きだって、書いてあるよ」

思いは確かに……その手を伝った。

カンバックママ 終

終

ママはこうやって、時間調停者に復帰した。

復帰早々、たくさんの迷惑をかけちゃっていて、娘としては大変に申し訳なかつたりする。

大体局長さんに「あたしが手紙を」なんて言っておいて、あの人は最初から結城さんに全部やらせるつもりだったのである。

それではれちゃって、世界が消滅したらどうするつもりだったのだろう？

「何にもなかったからオツケーです！」なんて言ってたみたいだけど……。

こんなママだから、タッグを組むパートナーが局長さんなのだと思う。絶対に、局長さん以外の人だと乗りこなせないに違いない。

いや、実際は局長さんも振り回されてるようだけど……。

20XX年七月五日十八時二十四分

野添智美永眠

過去は結局、何一つ変わらなかった。

結城さんは泣いて、泣いて、泣いて……だけど最後に、嬉しそうに笑ったそうです。そしてまた、今度は笑いながら、でも、やっぱり泣いたそうです。

現在はだから、変わったんだと思う。
よくわからない？

よくわからなかったって、別にいいよ。

だって、私だって全部わかってなんかいないもの。

でも、きつとそれでいい。

だってママが「そういうもんなのよ」って言っていたから、きつとそれでいい。

そうそう、結城さんのことだけど、彼は時間管理局で働くことになったらしいです。

時間跳躍はそれだけで終身刑並みの刑罰が科せられる重罪なのだけど、結城さんの一人でトラベルマシンを作り上げる技術力が買われて、時間管理局で技術者として働く代わりに無罪放免だそうです。

それはそれで、めでたしめでたし！

……なのかな？

カンバックママ 終（後書き）

読んでくださって皆様サンキューベイベ。
これでカンバックママは終了と相成ります。

駆け足で書いたんで、誤字脱字が多いかもしれませんが……なにと
ぞご容赦ください。

この作品が少しでも、皆々様の心の中に残れば……と思います。

フォーリンスター・チルドレン序

時間震というものがある。それは文字通り、時間に起こる地震だ。大地がぐらぐら揺れるのと同じに、時間がぐらぐらと揺れる現象を、時間震というのだ。

時間というのは普段は直線を引いたようにまっすぐで、過去から未来へと、ただひたすらに、延々と続いていく。それが何かのきっかけで、突然に波打つように曲線を描く。

それが時間震。

時間の揺れは、小さいもので数年、大きいものでは数十年の振幅を持つ。それが大地を揺るがす岩盤震（普通の地震を時間震と区別する為にこういうのは常識でしょ？）ならば、小さいものでも驚いて転んで怪我する人がでたり、大きなものならば家屋倒壊などで亡くなる人が出たりするけど、実は時間震には、それだけでは被害といったものはない。

ただちよつと勘のいい人が「あれ？なんだかおかしいな」と感じるくらいである。

なんだ、そんなことなら何の問題もないじゃないか。

きつと、そう思う人もいるだろう。

だけど、本当は「取り立てて気にすることでもない」なんてとんでもない。

なにしろ時間震は、時々時間に穴を開けるのだ。

岩盤震で道路に穴が開いたりするように、時間に穴を開けることがあるのだ。

一時性タイムトンネルと呼ばれるそれは、時折人を飲み込んで、

過去に飛ばしてしまう。一般的にはあまり関心のない話題かもしれないけれど、時間管理局には耳の痛い問題で、毎年少なくとも人間が一時性タイムトンネルに飲み込まれ、時間管理局はその時間難民の救助に追われている。

普通人が異時間に長時間触れていると分解症になってしまっわけ、そうなる致死率は100%となってしまうわけで……。

だから時間難民の救助は、一刻を争う非常事態なのだ。

そんな大変なことにあの能天気な私のママが出動することになるなんて、私にとっては頭の痛いことで……。ましてや救助対象である時間難民がママの苦手な……。

これは時間難民の救助に果敢に飛び出したママと、ママに救助されることになってしまった、かわいそうな子供たちの話。

フォーリンスター・チルドレン序（後書き）

ここから第二話。

一年もかかりました……なにやってんのや！

よろしくたのんまっさー。

フォーリンスター・チルドレン01

お星様が落ちてきそうだなあと、僕は思った。

もしかしたらお星様にさわれるんじゃないかなと、僕は思った。
たくさんの、たくさんのお星様が、きらきらしていた。

点いたり消えたりしていた。

時々、灰色の雲が、お星様を隠した。

お月様だって、きらきらきれいだった。

プラネタリウムみたいだなあ。

ねえ、ママ。プラネタリウムみたいだよ。

お星様、とってもきれいだよ。

僕、ずっと待ってるから。

ここでずっと待ってるから。

だから……

迎えに来てくれるよね？

シャワシャワと、どこかで蝉が鳴いているのが聞こえる。六月の初め。初夏の頃合であるといっていい時期だが、すでに猛暑の最中と同じように、蝉は合唱を繰り返している。

「いやはや、今日もあつついですねえ」

ぼんやりと網戸越しに外を見て、団扇で短い髪を揺らすのは井原アオイ。狭い狭い都市型住宅の、申し訳程度の庭に面した六畳の和室。首振り扇風機が静かに風を送っているけど、それだけでは涼をとるのに足りていない。

「八月とか、どうなっちゃうんでしょうね？五十度超えたりしませんかね？」

大きな胸を揺らしてアオイは正面にくるりと向きなおる。三十七歳とはとても思えないプロポーションをノースリーブシャツとホットパンツに包み込んだ彼女は、きつとこの場に思春期の男子中学生がいたならば鼻血を噴出させて失神させてしまうに違いない。

この場にいるのは中学生男子ではなく四角い顔をした浦沢俊介であるので、なんら問題はないのだが。

「この辺りは四十度を超えたこともないぞ」

浦沢は言いながら、ハンカチで額の汗をぬぐった。着ているのはサマースーツだけど、この時期ではすでにもうサウナスーツと名称変更しても差し支えないような気さえする。

「局長……」

アオイはがつくりとうなだれて浦沢を見た。五十度云々は冗談だったのに、返し刃があまりにもナマクラだったので、とても落胆している。

「それで、今日は何の用事です？」

日曜日のうらかな午後。唐突にたずねてきた浦沢に、アオイは聞いた。

「仕事だ」

「イヤです」

答えた浦沢に、間断いれず拒否を宣告するアオイ。

「……あれだけ復職したがっていたのか？」

「いや、そーなんですけどね？面倒な時って、やっぱりあるじゃないですか？そういう時はパスしたいんですよ。好きなときだけや

りたいなーって」

「勝手なことを言うヤツだな。大体君は復職以来一度も局に来ていないだろう。調停者といえども書類仕事もあるのだから、たまには顔を出してもらいたい」

「えー」

働いている職場に出勤しろという至極当たり前の提言に、あからさまにアオイは顔をしかめる。社会人としては口に出すまでもないほどの常識的なことなのだが、この人はそれが面倒くさかったりする。

「いつも書類は局長がやってくれてたじゃないですか」

ぷーと頬を膨らませる三十七歳。

「それは君が期限を三度破っても書かないからだろう。親切でやっていたわけじゃない」

浦沢はまた汗を拭いた。扇風機がぶーんと小さな音を立て、熱気を混ぜ込んだ生温い風を送ってきた。

嫌な仕事全部人に押し付けて今まで生きてきた三十七歳井原アオイ。もはや大人ではなく、三十七歳児だ。

「仕事はどうするね？」

「いやー、どうしましょう？あ、そうだ。風邪ひきました、風邪。

お腹出して寝てたんで。あー、お腹痛いなー」

「子供ですかあなたはっ！」

途中から話を聞いていたのだろう、勢いよく襖をあけ、アオイの愛する一人娘、サエがお盆を携えて室内に入ってきた。襖は端まで行つて、小さくバウンドして帰ってきた。

テーブルの傍らにムスツとした顔でヒザをつき、サエはお盆の上の汗をかいたグラスを二人に差し出した。グラスの下には当然紙製のコースターを敷いた。コースターは猫の絵柄だ。

アオイはグラスを手に取り、中身を一気にあおった。氷がカラんと音を立て、麦茶が全て飲み込まれていく。

「くあー、サエちゃんもう一杯！」

差し出されたグラスを手に取り、サエはすつくと立ち上がり、襖に手をかけた。

「局長さん、見ての通り、母は大丈夫ですから」

にこりと浦沢に笑いかけ、サエは部屋を出る。入るときとは裏腹に、静かに襖が閉まった。

浦沢は麦茶を一口のんだ。麦茶はよく冷やされた上に氷まで入っており、まさにキンキンだ。アイスクリーム頭痛を引き起こさんばかりの冷たさである。

「なるほどな。冷たいものを一気に飲めるほど、腹が痛いというわけだ」

今度は浦沢がにやりと笑う。

「あらまー」

十四歳の娘に毟にかけられる三十七歳！

「仕事……どうするね？」

「は、やらせていただきます！」

この子供のような母親は、そりゃもう陥落せざるを得ないわけ……。

フォーリンスター・チルドレン02

木々のあふれる山の中は、子供たちの格好の遊び場だ。いつの時代も、それは変わらない。

子供たちは母親にどれだけきれいな洋服を着せてもらおうとも、汚れることを嫌わない。野の中を駆けずり回り、草木にまみれ、土に汚れる。

遊歩道を設え、山の一部を芝生に植え替えた楠木山自然公園もまた例外ではなく、小さな子供たちの遊び場所になっていた。

幼稚園児くらいか、それともまだ通う前か。小さな子供が三人、楠木山に入っていく。

女の子が二人と、男の子が一人。

「待つてよ」

ピンクのワンピースを着た女の子が、二人から少し遅れた。整えられていたはずの長い髪が揺れる。その表情は、世の中にこれ以上楽しいことはないといわんばかりの満面の笑み。子供はなぜこんなにも無邪気に楽しむことができるのだろう。

「遅いよ！」

「待たないからねー、最初はちいちゃんが鬼！」

きやつきゃとはしゃぎながら、ポニーテイルの女の子と、半ズボンを穿いた男の子は木々にまぎれていった。

「もー！」

ちいちゃんと呼ばれた女子も、遅れて木々の群れに入り込む。

出遅れてしまったばかりに、かくれんぼの鬼になってしまった。ちいちゃんは、自分の足が他の子たちよりも少し遅いことを、ちょっと悔しく思った。

時刻は午後一時。

近頃熱気を帯びてきた陽射しを避ける意味でも、山の中は遊び場

としてちょうどよいように思える。

「ゆるさないからねえ〜！」

言葉とは裏腹に、楽しそうに、嬉しそうに、ちいちゃんは草木を分け入る。

せっかく整備されたレンガ敷きの遊歩道があるのだけど、三人ともそれを使うことはない。

「のぶくん！ みつちゃん！ どこー？」

「こつちだよー」

「こつちこつち！」

かくれんぼと追いかけてこを一緒にやるような鬼ごっこ。
のぶくんの声は右から、みつちゃんの声は左から。

二人は分散作戦に出たようだ。

ちいちゃんは少し迷って、みつちゃんのほうを追いかけることにした。ちいちゃんのはのぶくんのことも好きだけど、みつちゃんのほうが好きだから、だからみつちゃんを追いかけることにした。

「ゆるさないんだからねえ〜」

やや間延びしたように声を上げ、やっぱりちいちゃんは草の中を走る。子供の手にかかつては、道なんてあつてないようなものだ。何事も自由に活発に。

大人にないルールを、子供たちは持っている。

仲良し三人組の、いつもの風景。

ほんのすぐあとに、これがちょっとふしぎなことになるだなんて、三人は知らない。

本当は結構大変なことなのだけど、子供にしてみれば「面白かったね！」で済んでしまう小さな大事件。

まもなくして時間震が起こり、突如として昼は夜へと裏返る。

フォーリンスター・チルドレン03

「おかしいねー」

「うん、おかしいねー」

ちいちゃんとみつちゃんは、薄暗い森の中を歩いていた。手を繋いで、さくさくさくさく、落ち葉の上を歩く。

心もとない月明かりの下。

ついさっきまでは麗かな昼下がりでたったのだけれど、気がつけばとつぷりと陽は暮れ、夜へと時間は落ちていた。

時間震に彼女達は飲み込まれたのだ。

だから唐突に、不可思議に、その夜はやってきた。

さくさくさくさく。

二人は落ち葉を踏みしめて歩く。

「みつちゃん、おかしだよ」

「うん、ありがと」

ちいちゃんはポシェットの中からチョコレート菓子をとり出し、みつちゃんに差し出した。二人でお菓子を食べながら、さくさくさくさく、森の中を歩く。

「森がおっきいね」

みつちゃんが言う。

「ううん、違うよ。森はちっちゃいんだよ」

ちいちゃんが返す。

何を持ってして森の大きい小さいを判断しているのかはわからない。

「夜が急に来たね」

きよろきよろと辺りを見回しながら、ちいちゃんは言った。

ほんの数十分前。

ドスンという、音がした気がした。

それは多分、気のせいだった。

そしたら突然夜だった。

彼女達の体感を言葉にすれば、こんなところだろう。

ちいちゃんはみつちゃんを見つけたところで、鬼ごっこの鬼が交代するところで、そこで勝負は終わってしまった。

数十分の探検で二人がわかったことは、昼が夜に変わったこと、森が大きくなったこと（小さくなったこと）、そして遊歩道が消えてなくなってることだった。

「のぶくんどこいったのかな？」

「知らないよ。お山の中だよ」

さくさくと、森の中を二人は歩く。

彼女達と、そしてのぶくんの住居はこの小さな山のふもとのマンションだ。だから安心できるのだろう、二人はありえない状況においても、恐れることがない。

もしかしたら恐れがないのは子供特有の自由さから来ているのであって、常識に捕らわれた大人のほうが恐怖にうろたえるのかもしれないが……。

「ねえみつちゃん」

「なあに？」

ちいちゃんはポシェットの中から、震える小さな箱を取り出した。「お電話」

マナーモードの携帯電話が、ちいちゃんの小さな手の中でぶるぶると震えている。

フォーリンスター・チルドレン03（後書き）

二話のストックはあと8パート分。
急いで続き書かなきゃ！

あわわわわ・・・

フォーリンスター・チルドレン04

ドスンという、音がした気がした。
それは多分、気のせいだった。

だけど気付いたら夜だった。

のぶくんは思っていた。そうか、そうなんだと、思っていた。
小さな山の、一番てっぺん。そこには小さな崖があり、崖のてっぺんには子供一人が座れるくらいのスペースがある。

のぶくんは、小さな手で崖の急斜面をつかみ、ヒザをすりむいて
滑り落ちながら、崖を上る。

土壁のようになってる崖の斜面。突き立てた指は、小さな力の
こもった手のひらは、傷だらけだ。

それでも彼は上る。

のぶくんは諦めずに上る。

そこは一番高いところだ。

この山の中で、一番高いところだ。

だから、星がよく見えるんだ。

崖の周りには、木が少なかった。

崖上に飛び移れそうな、高くて崖の傍の木はなかった。

茂みに囲まれた崖の上。

のぶくんは、星を見るために崖に上る。

ママ、お星様がきれいだよ。

時間震に飲み込まれ、遡った過去。

数十年の時間を遡り、濁った現代の夜空しか知らない少年にとつて、過去の星空はプラネタリウムのようにきれいに見えた。

フォーリンスター・チルドレン05

時間管理局内のがらんとした一室にアオイは来ていた。トラベルする際に余計なものを巻き込まないように作られた、トラベルルームと呼ばれる部屋だ。

これからアオイは四十二年前の時間を跳躍し、過去へと向かう。要救助者は三名。共に身体的未熟者であるため、救助には迅速さが求められる」

アオイの隣でバインダーに挟んだ資料に目を落としながら浦沢は言った。

「……身体的に未熟、ですか…？」

「ああ、子供が三人だ」

「やつぱりお断りします」

アオイは子供が嫌いだったりする。

「君しか出られるものが居らんのだ。たらい回しに割く時間はないし、頼む、やってくれ」

時間管理局は管轄かぎつちぎちに区切られていて、別の局に人員を借り受けるには多大な時間がかかる。

「嫌ですって！子供なんて大嫌いなんですって！」

「君は立派に娘さんを育てただろう」

「サエちゃんも頭がいいから別なんですよ！でも他の子はみんなあつたま悪いじゃないですか！」

とんでもないことを言い出す人だ。

「……親の欲目、というやつだと思うが……。しかし、それならば仕方ないか。退職手続きを取ることに……」

「あ、凄いやりたくなってきました。やります。子供ってかわいいですよ！」

浦沢の切り札発動に、アオイは唐突にラジオ体操のような動きをとり、やる気アピールをし始めた。おいっちに、さんし。

「アオイさん、これ、非異時間性アームバンドと、位置情報端末です」

時間管理局の技術スタッフの制服を着た結城が二つのアイテムを差し出した。非異時間性アームバンドは異時間に触れることによる分解症を防ぐ為のもので、位置情報端末は携帯電話の電波を探知するリーダーだ。

「ありがとう菊池君」

「……結城です」

名前を覚えられていなかったからか、結城はしょんぼりとした表情になる。

「でも、なんか嫌ですよ。あー、子供なんてかわいくないし……」

この期に及んで潔くないことを言い出すアオイ。

「美人でかつこいとお姉さんが助けてくれると、三人とも期待しているのがなあ」

ため息混じりに浦沢が言うと、

「お姉さん一肌脱いじゃおっかなー!」

この人はあっさりだまされるのである。

フォーリンスター・チルドレン06

ガサガサと、山の中をアオイは歩く。背の低い草を蹴飛ばし、無遠慮な歩き方だ。

四十二年前の、季節は現在と変わらない初夏。

蒸した山林の中で、アオイはぴったりとした長袖シャツとジーンズ、それにブーツといういでたちだ。とても暑いはずなのだが、彼女は「虫に刺されたり草木にかぶれるから」と、夏にしてはかなりの装備である。

見上げると木々の間から月光に照らされた灰色の雲が去っていく。

「どの辺りに居るんですか？」

「もうちょっと先だな」

アオイが聞くと、インカムの先で浦沢が答える。

「そこに二人居るんですね？」

「ああ、女の子が二人居る。男の子の方は、ちょっと分からないそうだな」

「すごいですね、四十年も前になると、星が綺麗だなーって思いますよ」

「今より空気も幾分澄んでいるだろうからな。今のプラネタリウムなんかは、その時代の星を映していたりするそうだなぞ」

「へー」

星を見上げて、感嘆の声を上げる。

「ところで局長」

「なんだ？」

「どうして端末持たせてくれないんですか！」

位置情報端末を見せびらかされたにもかかわらず、アオイはインカムからの音声情報で要救助者を探している。

「君は壊す」

「時々です！」

『五十%の確率を時々とは言わない。それは大半と言うんだ』

精密機器ブレイカーとこっさり言われていた時期があったりするアオイだ。

「しかしですね、こんなところでかくれんぼするって、どうなんですかね？」

『今の時代には麓にマンションが建っていてな、その子達なんだ。それに今では街灯もあるし、遊歩道もある。子供たちにはいい遊び場なのだろう』

「こんな夜にですか？」

『……時間震があったのは昼間だ』

子供たちが昼間に山中で遊び、時間震に飲み込まれたことはしっかり説明してあった。にもかかわらず、アオイはさっぱり覚えていなかった！

「あ、助けに来てくれたおばちゃん？」

「おばちゃんお菓子食べる？」

アオイの視線の先で、ひよいひよいと小さな人影が立ち上がる。ピンクのワンピースを着ている子がちいちゃん、ポニーテイルの子がみつちゃんだ。

「……局長、聞いてた話と違いますけど」

美人なお姉さんを待っていると聞いていたのに、フタを開けてみると二人の女の子はおばちゃんと発し、なおかつ「たけのこの里」なんぞを差し出してきている。

『信じる。私はちゃんと伝えた』

子供はどう諭そうとも、伝えたことと違うことを言ってしまうものだ。

アオイは引きつり笑いを浮かべ、

「おばちゃんじゃないでしょー？お姉ちゃんでしょー？今度言って御覧なさい、ぶん殴っちゃいますからねー」

丁寧な言葉で返答しようと試みたがいかんせん心境がすっかり出

てしまっていた。

フォーリンスター・チルドレン07

小さな崖の上。

のぶくんは星空を見上げる。

満天の星は手が届きそうで、だけど届かなくて……。

血のにじんだ手のひら。

土に汚れたひざ。

高くもないけど、低くもない崖の上。

一生懸命に上り、やっと辿り着いた崖の上。

星空がちょっとだけ、近くなったような感じがした。

手の届かない星空。

今にも落ちてきそうな星空。

のぶくんのお願いは、星空のように届かないものではなく、
ちいさなちいさなものだ。

だけど、だけど……。

どれだけ待てばいいのだろうか？

小さな体に、時間は何倍もの、何十倍もの悪意を持って、押し掛かってくる。

フォーリンスター・チルドレン08

森の中をサクサクと、一人の大人と二人の子供が歩く。カチャカチャと、ちいちゃんの右手と、みっちゃんの左手でアームバンドが揺れた。

お姉さんにちいちゃんは左手を。みっちゃんは右手を繋いでもらいながら、森の中を歩く。

「星が綺麗ねー、本当に。ね、局長」

「……私には見えん」

浦沢はインカムと指揮所のモニタに映し出された地図をにらんでいるだけなので、詳しい情景などは見えない。

「のぶくんきつとね、お星様の見えるところに居るよ」

ちいちゃんがアオイを見上げ、言った。

「お星様？」

「うん、ママと行くんだって。パパが居た時はパパも行ったんだって。お星様好きなんだって」

「夜のお散歩でもしてたの？」

「んーん、プラネタリウムだって」

「プラネタリウムだってー」

二人の女の子は言い合ってきやつきやとはしゃぐ。

何が面白いのか分からないアオイは

「……」

苦笑いで両手を引っ張られていた。

「アオイ君。我慢するんだ」

浦沢がなだめるものの、ずっとアオイは顔がひくひくと引きつったままだ。

「星の見えやすいところってどこにありますかね？」

「普通に考えれば山頂だが、木が多いな。星が見えやすいとはいえない……」

「おばちゃんお菓子ー」

浦沢の言葉の途中、ちいちゃんはお菓子を差し出した。歩く最中、こうして定期的にお菓子をよこしてくる子供たち。

「はいありがとー。でもおばちゃんじゃないよねー？次言ったら次こそぶん殴るからね？」

局長こいつらピクニック気分です！」

『……言葉が悪いな、言いなおしなさい』

「こいつらピクニック気分で居やがります！」

言い直してもあまり変わらなかった。しかしアオイは「子供は嫌いです」と言い切っていた割りに、意外とうまくやっているようだ。

「あーはい、コラー！走り回らないの！」

子供たちは遂に鬼ごっこを再開してしまった。説教をしながら、アオイは二人を追いかける。

『ちいさな崖がどうやらあるな。そこからなら、星もよく見えるだろう。視界を遮るような木も、どうやらなさそうだ』

「コラー！卑怯なことしないの！二手に分かれなないの！こっちは一人でしょ！」

浦沢の声が届いているのか居ないのか、アオイは追いかけてここに夢中になっていた。

『アオイ君！アオイ君！！』

果たして浦沢の耳元には、ドタドタと走り回る音だけか聞こえるのであった。

フォーリンスター・チルドレン09

ちいさな崖の下に三人は来ていた。

その崖の上は浦沢の言ったとおり視界を遮るものがなく、星がよく見えそうだった。そしてのぶくんは、やはりそこに居た。

月明かりを受けるのぶくんを、アオイは見上げる。

ちいさな女の子たちは「パパが居たころはパパともプラネタリウムに行った」と言った。

のぶくんの両親は、2年ほど前に離婚した。

家庭の事情というヤツで、踏み入れることの出来ない領域で、母親に引き取られたのぶくんは、仕事に追われる母親をいつも待ち焦がれていただろう。

暗い部屋に、一人残されることもあっただろう。

辛い時に、一人ですごさなければならなかったこともあっただろう。

「プラネタリウムはね、ママが迎えにきてくれるんだって」

「だからのぶくん、プラネタリウムが好きなんだって」

みっちゃんと言った、ちいちゃんが後を継いだ。幼いなりにのぶくんの様子を見て、感じるものがあつたのだろうか？その声は、ごくごく静かだ。

アオイはちいさな崖を上る。

子供には辛い崖も、大人で、なおかつ体力に自信のあるアオイには、それほど苦にならない。

からからと小さく小石の崩れる音に、のぶくんは見上げていた視

線を落とす。

「帰ろっか、ね？」

努めて優しく、アオイは声をかけた。

のぶくんはぷいっと視線をそらし、また空に向ける。

高い高い星空。

「ママを待ってるの？」

アオイの問いかけに、のぶくんはどきりとした。

そう、のぶくんはママを待っている。

小さい時。

今よりもっと小さい時。

のぶくんは家族でプラネタリウムに行った。

プラネタリウムは、のぶくんの家族の定番だったのだ。

パパがいなくなったあの日。

あの日も、プラネタリウムに行っていた。

九十分の上映時間。

のぶくんを置いて、迎えに来るからと言って、パパとママはどこかに行ってしまった。プラネタリウムの上映開始と共に、別の場所に行ってしまった。

上映終了時、迎えに来たのはママだけだった。

それからは、パパは家に帰らない。

子供心に家族が壊れたのはなんとなく分かったし、パパが帰らないことには、もうなれた。

だけど、のぶくんは一人になるたび、プラネタリウムのことを思い出す。

迎えに来てくれるママのことを思い出す。

一人になってしまうのが怖いから、迎えに来てくれるのを思い出す。

夜空があるなら、プラネタリウムがあるなら、ママは迎えに来てくれる。

アオイはそつと手を差し伸べた。

「帰ろ。ママはね、待ってるんだよ、のぶくんを」

優しくアオイは語りかけた。

一人になった子供の心を、アオイはよく知っている。だから、優しくアオイは語りかけた。

アオイの一人娘、サエも、小さい時は一人で過ごす日々が多く、じつと耐えていた。父親は単身赴任で、アオイもまた仕事をしているから、サエは一人で過ごすことが多かった。

だからこそアオイには、のぶくんのことを、よくわかった。

「ね？」

優しい手が、すぐそこにある。

視線をおろせば仲のよい友達も居る。

「ママ、待ってるの？」

のぶくんの頬は、涙の乾いたあとがあった。

きつと、ずっと待っていたのだ。

長い時間を待っていたのだ。

二時間か、三時間か。

時間にすればそのくらいだったはずだけれど、のぶくんにはもっ

ともつと長く感じたはずだ。

「そう。ママ、待ってるの」

笑んで、アオイは頷いた。

「わかった」

のぶくんもまた頷き、そして立ち上がる。

その時……

疲弊した子供は崖上で足を滑らせ……

小さな体が崖下に落ちていく。

アオイはすばやく手を伸ばすが間に合わず……。

茂みの中から、何かが飛び出した。

フォーリンスター・チルドレン10

崖から落ちたのぶくんを、茂みの中から飛び出した人影が支えた。
「あー！」

飛び出してきた人影を指さし、ちいちゃんが頓狂な声を上げる。

「おばちゃんだー！」

みっちゃんもまた、大きく声を発した。

茂みから飛び出して、アオイはのぶくんの体を支えたのだ。

「もー絶対殴る。お姉ちゃんね、怒ったら怖いからね」

草木にまみれ、アオイはぼやくように言った。

『まったく、なにをするのかと思えば無理をして』

耳元で、浦沢がため息混じりに言った。

のぶくんが落ちたとき、とっさの判断でアオイは再び時間を飛んだのだ。数秒単位で時間を跳躍し、のぶくんをその両手で支えたのだ。

「お姉ちゃん、大丈夫!？」

腕の中で声を発したのぶくんはアオイは、

「いい子ね、あんたは許す」

痛みをこらえて笑顔で答えるのだった。

「ママね、途中から居なかったでしょ？」

のぶくんを連れてやってきたサエは、頬を膨らませてアオイに言

った。

市内で唯一のプラネタリウム。
のぶくんの家族がよく通っているプラネタリウムだ。

アオイはサエを連れて、のぶくんを誘ってプラネタリウムにやってきたのだった。

だが、アオイは上映開始早々に席を立っていた。

「星なんて、見てたって面白くないじゃない。五分が限度よ五分が」
アオイはぷーと頬を膨らませて娘に言い訳をする。サエも頬を膨らませているので、ふたりともフグみたいな顔になっていた。
それにしたって、プラネタリウムが好きな男の子の前でとんでもない発言である。

「そんなこといいでしょ、サエちゃん。のぶくん、ほら」
アオイはプラネタリウムの施設前の広場で、通りの先を指さした。

示し合わせた時間きっかり。

やってきたその人はのぶくんの……。

フォーリンスター・チルドレン 終

傷だらけになって帰ってきたママは、普段ならちよつとした怪我でもブーブー文句を言うのになぜか上機嫌だった。

なんだかよくわからないが「親子っていいものよね」とか言っずうっとニコニコしているのだ。

どうやら女の子二人が両親と再会したときの様子を見て、酷く感動したらしい。

私もその様子を聞いて嬉しかったし、だからのぶくんのこと、突然プラネタリウムに連れて行かれたのには驚いたけど（そのために学校をお休みしたけど）、のぶくんとお母さんの様子を見ていると、とても怒る気になれない。

ママはのぶくんのお母さんに、時間を取ってお話してあげてくださいと、珍しく敬語を間違えることなく話をしていた。

のぶくんのお母さんは恐縮しきりで頭を下げ、感謝の言葉を述べて、のぶくんと二人で帰っていった。

見送るママが嬉しそうだったのに、私は気付いていた。そしてちよつと涙ぐんでいたことに、気付かないふりをした。

あの二人ならうまくやるわよと、ママは言っていた。

それは私もそう思う。

私もママと正直に話すことができない時期があったけど、今ではこの通りの仲良しさんだ。

のぶくんたちはきっと時を越えて、私達のようになるのだと思う。

フォーリンスター・チルドレン 終（後書き）

読んでくださった皆様サンキューベイベ。

フォーリンスター・チルドレン終わりとなります。

三話がまだ出来ておりませんので、それまで完結とさせていただきます。

1話から2話は1年お待たせしましたが、すぐ書きたいです。
待ってくださると幸いです。

では、またの機会に。

ランニングアウェイ・ストレイドッグ 序

オーバーテクノロジーという言葉がある。

それは現代社会にそぐわない、超越した科学力を持つモノを総称した言葉であり、過去に栄えた文明の遺産だったり、未来世界の落し物だったり……とにかく、現代社会に生活している私たちにとって「ありえない」モノだ。

SFなどの物語でよく語られるオーバーテクノロジーだけれど、実は空想の存在だけというわけではない。

映画の題材として扱われたこともある、クリスタル・スカル。名前そのまんまで、水晶で作られたドクロなんだけど、これはちゃんと実在するもので、だけど今の今まで作り方が解明されていない。「もしかしたらこんな作り方かも」という方法はあるにはあるのだけれど、クリスタル・スカルが出土された数百年前の技術では、とてもじゃないが、その技術はつかえないのだ。

だからオーバーテクノロジーというものは、言葉だけじゃなく、その存在は確かにある。

多くの場合、それは過去からのものだけれど……。

今の時代「実はそれは未来からの落し物でした」なんてことも、無くはないかもしれない。

でも本当は、それはあつてはならないことで……。

なぜならば、未来の技術が過去に紛れ込み、そしてそれが未来からの物であるとわかってしまったとき、時空が消滅する恐れがあるからだ。

未来と過去との時間の矛盾が時空に影響を与えろかなんとかで……。

私たちの世界は、一瞬でなくなってしまうかもしれないのだ。

私は知らなかった。

こんな大変なことの解決が、ママの双肩にかかっていたなんて。

知らずにいられて、よかったと思う。

もし知っていたなら、きっとストレスで胃に穴が開き、入院するハメになっていただろう。

これはママと、世界の存続をかけたオーバーテクノロジーと、それと新しい家族の話。

ランニングアウェイ・ストレイドッグ 序（後書き）

第三話始まります。

週に二回、月・金のUPを心がけます。

宜しくベイベ。

ランニングアウェイ・ストレイドッグ01

「ちょっと待ちなさいよ！」

夏だっというのに、あたしは何でこんなに汗だくになって走り回らないといけないのだろう。

路地をドタバタと走り回り、今にも足がもつれて倒れそうだ。

『アオイ君、もっと速く走れんのかね』

インカムの向こうで、局長が無茶を言う。

あたしはもう若くないんだから、あんなすばやいものに追いつけというのもおかしい話だ。

いや、あたしは十分若いけど……。

路地の角を、茶色い物体が曲がって行く。

あたしはそれを追いかけて……。

何でこんなことになったのだっ！

1

ジワジワと、外で蝉が鳴いている。

夏も盛りを向かえ、暑い日々が続いている。毎夜毎夜熱帯夜で、凄し辛いつたらない。

庭に面した和室の片隅で、エアコンがごうごうと気を吐いている。

「で！何の用ですかもう！」

だとテーブルを拳で叩いて、アオイは怒り心頭だった。

「……何を怒ってるんだね？君はいきなり」

テーブルを挟んでアオイと向かった浦沢は、唐突な怒りに至極当然の返答をした。

復帰以降、未だにアオイは自主出勤をしておらず、浦沢がこうして今日も仕事を持ってきている。

そしたら突然アオイが怒っていたのである。

「だってね！暑いですよー！」

「……それで怒られても、私にはどうすることもできないのだがな……」

「局長が急に来るからいけないんですよ！だからもう！まだエアコン効いてないじゃないですか！」

「それは君が出勤してこないからだろう」

時間調停者の仕事は常に突発的で、予定を立てられないのだから、急に浦沢が来るのも当然である。

「それでなんですか！？」

タンクトップの襟に指を入れてパタパタと風を送り、またも怒り気味に問う。アオイはタンクトップにホットパンツといういでたちであり、上着を脱いでいるとはいえスーツ姿の浦沢の方が暑いだろうに、浦沢は身じろぎ一つしない。

大体、アオイは扇風機まで使っているのだ。それで暑いなどと、よく言えたものである。

テーブルの上で、麦茶のグラスに入った氷が溶けて、かららんと音を鳴らした。

「君に仕事だ」

「イヤです」

即答。

アオイには勤め人という自覚が全く無い。

上司に自宅まで足労させ、その上やらないといけないはずの仕事を0.1秒で断ってしまう。

「こんな暑いのに、仕事なんてやってらんないですよ！バカのやることですバカの！」

数十億人にも上る人間を、アオイは言葉一つで敵にしまった。真面目に勤め、稼ぎ、生活の糧にしているすべての人間に彼女は謝るべきである。

「わがママは許しませんよ！」
突然フスマがすらっと開く。

長い髪をポニーテイルにくくったサエがずんずかと、室内に入ってきた。サエはアオイの横に仁王立ちし、ジロリと母親を見下ろす。
「ちゃんと行きなさい」

「えー、でも……」

まるで学校を仮病で休もうとする子供とその親のようである。立場が全く逆転しているが。

「サエさんもこう言ってることだし。お願いだからやってくれないか？」

こっちは担任教師のようだ。

「うー……」

ぷくつと頬を膨らませるアオイ。

娘に叱られて、娘大好きなアオイとしては心がぐらぐら揺れている。あと一押しで陥落しそうな気配だ。

「今晚はオムライスです！」

「うん！やる！」

子供か！

渋りきった拳句の最後の決断。

鍵になったのはオムライス！

ランニングアウェイ・ストレイドッグ02

キラリと光る小箱を見つけた。

それは小箱をくわえ、走り出す。

宝物だ。

新しい宝物だ。

ピンと立ったしっぽが、興奮のあまり激しく揺れる。

新しい宝物だ！

大切にしようと思った。

大切にしてくれると思った。

きっと大切にしてくれると思った。

アスファルトを蹴飛ばして、軽快にそれは走る。

それは昔っからの人間の隣人で、ふさふさの茶色い毛並みを持ち

……。

ピンと立ったしっぽが、興奮のあまり激しく揺れる。

大切にしてくれると思った。

きっと大切にしてくれると思った。

軽快にそれは走る。

アスファルトを蹴飛ばして、
軽快にそれは走る。

ランニングアウェイ・ストレイドッグ03

時間管理局内、トラベルルーム。

トラベルの際に巻き込むものの一切がないその一室に、アオイは来ていた。

「今回はなんですかーあ」

浦沢の持つ資料を、アオイは横から覗き込む。浦沢の持つ資料には、トラベル先当時の生活様式や、地図がファイルされているだけだ。

浦沢が眉をひそめるのも構わずに、アオイはパラパラと資料をめくつてゆく。

住宅街と思しき地図の一点に、赤い丸印がついている。これはなんだろう？

「おほん」

注意の意味を込めて、浦沢は咳払いをした。

「あ、すいません」

舌をぺろつとだし、アオイはの底着込んだ顔をひっこませた。資料によれば、どうやら五十年ほど前に遡らなければならないようだ。

「遺失物の回収って書いてあったんですけど、なんですか？それ」

トラベルルームは通常トラベルする時にのみ使われ、作戦説明は本来併設されている指揮所で行われるのだが、アオイにはまだ作戦の一切が知らされていない。

なぜかという、この人は「ヤだな」と思うと逃げ出すからだ。トラベルルームに閉じ込めてしまえば逃げ出すことはできないので、だから作戦開始の直前まで、彼女に作戦が説明されることはない。これは復帰してからというわけではなく、現役時代からののだが、つまりアオイは昔からよく逃げ出していたということだ。

まったく、よくできた大人である。

ちなみにトラベルルームはトラベルマシンとしての設備も有しているの、アオイが「行きませんよ！絶対に！」と言い張って居座っても、無理矢理飛ばすことが可能だ。

「これです、アオイさん」

技術スタッフ代表として居合わせた結城が、ポケットから小箱を取り出し、アオイに見せる。

「あら、新機種じゃない、神林君」

「いや、結城です……」

名前を一向に覚えてもらえない結城が示したのは、携帯電話だ。一見するとシルバーの小箱にしか見えない、最新機種だ。

「これ、紗枝ちゃんが欲しいって言ってたのよねー」
言っても欲しそうに指をくわえるアオイ。

そんなふうに見たって、結城はくれないだろう。

「……」

くれるかもしれない。

「買ってやればいいのではないか？」

「ねだったからってほいほい買い与えちゃダメって言われてんですよー」

よくできた娘である。

普通はもちろん、娘のわがままをたしなめるのが親の役目だ。

「って……」

アオイは結城の持つ携帯電話を指さした。

「遺失物ってこれですか？」

小さな箱は、結び付けられた猫のキャラクタータをゆらゆら揺らしている。

「その通りです。これです」

結城は頷いて携帯電話をポケットに仕舞う。

「あたし五十年前にケータイ拾いにいくんですか！？」

「そうだ」

「そんなの！落としたやつが行けばいいじゃないですか！」

「落とし主はトラベラーじゃないんですよ。だから次のトラベルまではもう少し休まなきゃいけないくて」

「それにな、アオイ君。君も知っているだろうが、未来からのオーバーテクノロジーは世界を消滅させかねん。誰かがやらねばならんのだよ」

「そんなの知りませんよ！大体ね、世界はそんなヤワじゃありません！あたしが保証します！」

無茶を言う人である。

「でもですね、アオイさん。現在のものが五十年前にあるとなると、時間的な矛盾が生じてですね、世界がギャップに耐え切れずに……」

「るさい！」

アオイの空手チョップが結城の顔面にめり込んだ。

技術班面目躍如の解説も、アオイにかかつては形無しだ。

「なんかもー！小間使いですよこんなのお！」

口から火でも噴かんばかりの勢いで、アオイはだんだんと地団駄を踏んだ。子供のお遣いだと怒っているのだが、今のアオイの姿を見ればぴたりと当てはまっている役割だともいえる。

「ことは一刻を争う。君は下らん仕事だと思っっているかもしれんが、これは紛れもなく、世界を救う仕事だ。他にできる人間は……おらんだろうな」

浦沢の言葉に、アオイの耳がピクリと動く。

「そうですね。伝説のトラベラー伊原アオイでなければ、成し遂げられませんよね」

結城もアオイの御し方をだんだんわかってきたようだ。

右足を浦沢、左足を結城が担いで、二人がかりの肩車。

ぐあっとプライドが持ち上げられて、アオイはにまにまと笑いがこみ上げてくる。

「しょ、しょうがないですねえ。あたしがやりますよお」

やはりと言うかなんと言うか、分かりやすいのが井原アオイの特

徴だといえる。

ランニングアウェイ・ストレイドッグ04

五十年前も前の住宅街。三角屋根の瓦葺きの低い建物が多く、なんだか空が広い。

四角い建売住宅や、背の高いマンションの乱立した町並みに慣れているアオイには、違和感がおおきく感じられた。

それはさながら、テレビで見た昭和の町並みにようで、アオイには既に記憶にはない町並みだ。

ただ、足元は固められた土かと思ったら、きちんとアスファルトで舗装されている。

ただ、「今」よりもなんとなく風が涼しいかなと、アオイは思った。
『アオイ君、とりあえず北に向かってくれ』

「えっと、どっちですかね？」

キョトンと首を傾げるアオイ。

『……』

インカムの向こうで「方角もわからないのか？」と、浦沢があきれているのをアオイは感じ、

「違いますよ！初めての場所って方角がよくわからなくなるじゃないですか！」

あわててわたたと弁明した。

『……左だ。君から見て左のほうに向かいなさい』

心なしに……いや、はつきりとしたガツカリ感が浦沢を包む。

「それで、どんなケータイでしたっけ？田中一郎さんが落としたのは」

『……説明したはずだが？それと、そんな職員はうちにはいない』
「そうでしたっけ？」

どっちに対してのそうでしたっけ？だろう。

『……一見するとただの薄っぺらい長方形の箱だ。位置はこちらで教えるから、君はそれ以上気にするな』

「やっぱり位置情報の端末は持たせてもらえないんですね」

『君は壊す』

いわれたとおりに、アオイはそれ以上気かけずに、北に向かう。熱を帯びたアスファルトからじわりじわりと不快な湿気が上ってくるが、風が建物の隙間からやってくるので、すぐに不快さは取り払われた。

やはりこの時代はすごしやすいとアオイは思った。

「でも局長、ケータイがこの時代の人に拾われて、何か起こるんですか？本当に。そもそもこの時代のケータイと何が違うんです？」

『そもそもそちにケータイはまだない』

「またまた、局長嘘はやめてくださいよ。あたしが生まれたときからあったんですよ？あたしのママも持ってたし、ないなんてことは

……」

『君の生まれたころもなかったと思うがな。いや、あったかもしれないが、あったとしても、君の持つてるハンドバッグよりも大きいぞ』

「それ本気ですか？」

『本気だ。しかしまあ、機能は停止させているし、その時代の人間には傍目には小さな箱にしか見えんよ』

「じゃほつといてもいいんじゃないです？もしかして誰かに拾われても、ただのキンピカな箱ですよ」

『研究機関で調べられんとも限らんだろう？』

「そんなことありますかねえ」

『箱にしか見えなくとも機械だ。原始時代じゃあるまいし、研究されても不思議ではない。もともと、研究機関に運ばれば、だがな』

「気にしないでいいよーな気がしてきました」

『気がするでは放っておけんよ。もし研究され、誰かが未来からのものだど気付いてみる。たちまち世界が消滅だ』

一つの落し物をきっかけに、多きな世界があつという間に消えてなくなる。想像したくもない。

「井上キヨシローさんもそんなのいやでしょうね」

『……そんな職員もウチにはいない』

浦沢はちゃんと名前まで教えたはずだと、手元の資料を見直した。しっかりと、資料には落とし主の職員の名前が書かれている。名前の下には「減俸20%三ヶ月」と処罰も記されている。

アオイはただ名前を覚えてないので、適当に言っているに違いない。

ランニングアウェイ・ストレイドッグ05

『アオイ君。ケータイが動いた』

「え！？歩くんですか？」

携帯電話から二本の足がにゅつと出て、大魔王井原アオイから必死の逃亡！ってそんなわけあるか。

『誰かが拾ったに決まってるだろう』

「そうですね。あたしはまた新機能かと思いましたよ」

『いいから急ぐんだ。もう近いはずだぞ』

「わかりましたー」

対象が動いているというのならのんびりと歩いてもいられない。

アオイはスニーカーで道路を蹴り、ジョギングくらいのスピードで走り出す。

『そこを左に曲がれ』

浦沢の指示を耳に聞き、ほっほと息を吐きながらアオイは走る。

普段からプロポーション維持のため多少の運動はしているので、これ位は苦にならない。

が……。

「局長。エアコンつけてください」

如何せん暑さは拭えなかった。

アオイの額には、既に玉のように汗が浮き、流れている。

『うちわくらいは持たせてやればよかったな、スマン』

「あたしタオルも持ってきてないですよ……」

悲しそうな声でアオイは返した。

汗をかいたら早く拭かないとべたべたして気持ちが悪い。すぐに着替えないとイライラする。

こんなことになるのなら装備をきちんと整えるべきだったと、アオイは後悔した。

アオイは半袖半パンといった夏休みの少年のようないでたちで、

腰にポシエットを巻きつけてはいるものの、中身はペットボトルに入った水とお財布だけだ。「お水だけあればいいっスよ！大丈夫っス！」と、体育会系のノリで敬礼した自分をアオイは恨めしく思った。……お金も五十年後のものだけど、これってつかえるのだろうか？

小走りにかけるアオイの前で、何かがさつと角を折れて行っただ。

「アオイ君、角を曲がった人物がケータイを拾ったようだ。追いかけて声をかけなさい」

「……局長。耳があつて、尻尾があつて、ふさふさしてて、四本足で走る人間ってなんですかね？」

「……何を言ってるんだ君は」

「ちなみにワンと鳴きます」

「それはひよつとして……」

「猫ですね」

「犬だろう」

「冗談ですよ」

「わかつている。だが君はわかつていないようだな。いいか？職務中だぞ？」

言外に冗談をかつ飛ばしている場合じゃないと、浦沢はクギをちくりとさした。

「だって局長が人物っていったじゃないですかあ」

「なるほど、犯人は犬か。すぐに追いかけて取り返すんだ」

「研究機関に持ち込まれたら大変ですからね。NASAとか」

「それはないだろう」

「NASAはやりますよ？」

「……いいから速く追いかけてなさい」

「あいあいさー。待あてこのバカ犬ー！」

角を折れると、茶色の毛並みの犬がてってってとのんびり歩いていった。

と、アオイの声に驚いて犬は振り返り、追いかけていること

を察して犬は加速する。

『……加速したが気のせいかね？』

浦沢の目の前のモニタでは、ゆっくりと移動していた地図上の赤い点が明らかに速度を増していた。

「すいません。気付かれたみたいで」

アオイはテヘへと笑い、

「バカ犬ー！待あてー！」

手を振り上げてがー！と吠えた。

赤い点は更に加速をする。

『……アオイ君、警戒させるようなことをなぜする……』

浦沢の注意も聞かず、アオイは「待てえ！」と声を荒げている。

犬はだかだかと走っていく。

人間と犬では走る速度もスタミナも段違い。ましてや相手は薄く汚れた野良犬であり、日々野原を駆け回っているものであり、つまり

……

「局長。逃げられました」

人間一人を撒くくらいはお手の物なのであった。

ランニングアウェイ・ストレイドッグ06

その犬は雑種で女の子で、茶色い毛並みを少し汚している。

野良犬なのだからそれは仕方ないことで、だけれど普通の野良犬よりは、彼女の毛並みは綺麗だ。彼女は綺麗好きで、その上人懐こくて、野良なのに人の手で洗ってもらったりしているからだ。

犬は水に濡れるのを嫌うと言うけれど、彼女は実はそうではない。本当は少し嫌だけど、洗ってもらったあとはドライヤーで乾かしてもらえから、だからシャワーは好きだった。

そんな彼女にとって、人間は友達だった。

友達だったはずだった。

歯と歯の間に挟まって、小さな小箱がカチカチ揺れる。

怖い怖い女の人が追いかけてきて、突然大きな声を張り上げた。

「待てえバカ犬！」犬である彼女にも、言葉は大体理解ができる。だから彼女には、女の人を自分を追いかけてきていることがわかる。

なんであたしは追いかけてるのだろう？

パニックになりながら彼女は四肢をアスファルトにぶつけて走る。

路地を抜けて、角を曲がって、彼女は走る。

大切な宝物だ。

大切な大切な宝物だ。

なぜ追いかけているのかわからないけれど、宝物だけは守り抜く。宝物を安全な場所に隠して……。

住宅街をあっちこっちに走りぬけ、片側二車線の大通りに彼女は出た。

きよろきよろと、彼女は辺りを見回す。

全力ダッシュで逃げ惑い、怖い女の人には気配をなくした。

生身の人間の体力が自分に適わないことも、彼女は知っていた。

速度を落とし、彼女は走るのをやめて歩き出す。あの女の方は、どうやらもう追いかけてきていないようだ。

と思ったら……。

「フフフフ、そうそう簡単に出し抜かれる人間様じゃないのよ！」

こわいこわい女の方が、路地の隙間から大通りに歩み出て……。

彼女は心臓が止まるほど驚いて、文字通り飛び上がるほどに驚いた。

ランニングアウェイ・ストレイドッグ07

時間は少しぎゅると戻る。

「局長、犬って速いですねえ」

ヒザに手をつけて悩ましげなヒップをこれでもかと突き出し、アオイは屈んだ姿勢でぜはぜはと息をついた。少しばかり走っただけなのに、じんわりと汗が浮き、息が絶え絶えだ。

もう歳だなーとアオイはちよつとだけ思い、すぐさま大気圏の彼方までぐしゃぐしゃ丸めて放り出す。あたしはまだまだ若い。女子高生で通じるわ！

『君が大声を出すからだろう』

浦沢はインカムの向こうであきれ果てていた。野良犬が人間から「こらあ！」と大声で叫ばれ、追いかけられればそれは逃げると言うものだ。もつとそおつと近づいて、ムツゴロウさんみたいにわしゃわしゃと撫で回せば、無愛想な猫じゃなくて懐こい犬なのだから笑ってケータイを返してくれそんなもののなに……。

「完全に撒かれちゃったみたいですねー」

木の板を打ち込んだだけの様な簡素な板塀に軽く寄りかかり、アオイは手の甲で額に浮いた汗をぬぐった。体が火照って熱い。夏場に運動なんてするもんじゃないなど、アオイは思った。

『大通りに向かっていているようだ、早く追いかけなさい』

「すいませんお水飲んでもいいですか？」

断りを入れたくせに許可も待たずにアオイはポシエットからペットボトルを取り出し、既にキャップをひねっている。クキつかすかな音と手ごたえを伴い、くるとキャップが手の中で回る。

『構わないが、なるべく急いでくれ』

「ふあい」

水を飲みながら返事をするものだから、唇の端からこだわりのミ

ネラルウォーターが筋になってこぼれた。

「むぐ……」

やはり手の甲で水をぬぐい、アオイはズボンのポケットをまさぐってハンカチを探す。タオルは持つてくるのを忘れたが、ハンカチはサエがいつも用意してくれるから忘れない。

と思つたら、ポツケの中にはハンカチはなかった。そういえば今日は自分で全部用意したことを思い出す。そりゃあタオルも忘れるつてもんである。

「……急ぎなさい」

さすがの浦沢も苦言を呈した。

オロオロとアオイはポケットをひっくり返してまでハンカチを探しているが、どこにもそんなものは入ってなかった。ポシエットも開けたり閉めたりして何度も中身を確認しているけど、繰り返し返したって中身が変わるはずは、そりゃないのであった。

ランニングアウェイ・ストレイドッグ08

指示に従ってアオイは五十年前の町並みを小走りに走る。

四角い家やマンションの多い「今」と比べ、三角屋根の家や小柄なアパートの多いこの時代はアオイにとって新鮮だった。なんだか家一件辺りの庭が広いように思え、大きな木がにきつと植えてあったりして、健康に良さそうだなあとアオイは思う。

「庭が広いといいですねえ。お花とか植えたいですよ」

『そして枯らすんだな？』

「失礼な！豆に世話しますよ！」

『ほう、以外だな』

「サエちゃんが！」

どこまでも他力本願な母親であつた。

『……』

そりゃ浦沢も言葉を失うと言うものである。

路地を飛び出し、大通りにアオイは出た。

飛び出したその瞬間、ばつちり犬とアオイは目が合った。

「フフフフ、そうそう簡単に出し抜かれる人間様じゃないのよ！」

にやりと笑い、小動物ににじり寄るアオイ。対するちよつと汚れた茶色い犬は、尻尾を寝かせて後ずさる。

怯えきって退くワンちゃんは、しかし自らを奮い立たせて踏みとどまり、宝物をとられるまいとクルルと小さく喉の奥でうなり、
「ワンッ！」

迫り来る脅威に向かい精一杯の声で吠えた。

と、その瞬間口にくわえていた携帯がぽおんと飛び上がり……。

小箱はアスファルトにカツンと音を立てて落っこち、カラカラ滑ってちょうど一人と一匹の間に。

アオイの頭の中で、パンと拳銃が号砲を上げ、万国旗が銃口から軽やかに舞い上がった。

スタートの合図だ！

……なんかちょっとおかしいけど。

「そりゃあ！」

アスファルトをこれでもかと蹴っ飛ばし、汗でドロドロになることも考えず、アオイは飛び出した。

「ワウッ」

四肢を打ち付けて、犬だって間髪入れずに駆けだす。

お互いの距離は百メートルがあるかどうか。

ちょうど真ん中に景品の小箱がちゃんと置いてある。

一瞬で勝負の決まるスプリント。

勝つのは自由奔放ワガママ主婦か！

それとも太古の昔からの人類の隣人か！

決着は！

「あー！！」

どひゅんと犬はすぐに五十メートルをかつ飛ばし、陽の光を受けてキラリと反射した小箱を口で掬い上げ、直角に曲がって車道のほ

うへ。

「待ちなさい！」

そりやまあ、犬と人とは短距離走をすれば、叶わないのは当然のことである。もしかしてオリンピック選手くらいなら勝つことも可能かもしれないが、井原アオイは日ごろお煎餅食べながら昼ドラを見ている三十七歳主婦だ。美容健康のためにジョギングくらいはしているけど、そんなことで犬に敵う人間は居ない。

犬は近くの歩道橋を駆け上がる。

「こーらあゝ！」

アオイだつてすぐさま追いかけた。手を振り上げて頬を膨らませ、どたどたと足を踏み鳴らして階段を駆け上がる。

一足先に通路上がった犬は、欄干に向けてぴよいと飛び出した。そのまま欄干を飛び越える。

高い高い歩道橋の上。犬は空中に飛び出し、車道からは数メートル。

「ばかめっ！自分を猫と間違ったか！」

ハハハと、アオイは勝ち誇ったように笑った。

いや、さすがに猫だと思っちゃいけないと思うけど……。それに猫でも歩道橋から飛び出しちゃ着地も出来ないと思うけど……。

そのとき、幌を付けたトラックがゴーッと歩道橋の下を通り抜け……。

トラックの幌の上に、犬はぽそんと乗った。

「うええええ？」

欄干に両手をついて半身を乗り出し、アオイは驚嘆の声を、思わず素っ頓狂に発してしまう。

目の前から犬を乗せたトラックはどんどん遠ざかり……。

「オンッ！」

幌の上に携帯をおき、勝どきのように犬は吠えた。
ハリウッド映画の主役かお前は！

『おお、すごい勢いで遠ざかっていくな』

眼前のモニタに現した地図上。高速で遠ざかっていく光点を眺め、
浦沢はどこか感心したような声を上げる。

「感心してる場合ですか！バカア！」

地団駄踏み踏み、騒ぎ立てるアオイ。今あなたがバカと言った相
手は上司なのですが、そうですかそんな認識はないですか。

向かう信号は見事なまでに真っ青で、トラックはもう見えなくな
っていた。

ランニングアウェイ・ストレイドッグ09

がらんとしたトラベルルームに隣接して、十畳ほどの小部屋がある。ガラス窓越しにトラベルルームを観察できるその部屋は指揮所と呼ばれており、トラベルマシンの操作盤や各種のモニターなどが所狭しと設えられており、四人も人間が入れば牛ぎゅうづめになるほど狭苦しい。

モニタにはいま、アオイが跳んだ五十年前の地図が映し出されており、光点が二つ表示されている。画面右上に赤い光点。同じく左下に青い光点。赤い点が犬のくわえた携帯電話のそれであり、青い点が時間調整者、つまりアオイだ。両方ともものんびりとした速度で移動を続けている。

幌つきのトラックに飛び乗るというハリウッド映画張りのアクションを繰り広げた犬は、やはりハリウッド映画のそのように、今度はトラックから地面へと飛び降りたのだろう。高速移動をやめ、至極ゆっくりと動作している。

もはや数キロメートルに及ぶ大差をつけ、アオイが自分に追いつけないと高をくくっているのだろうか？最初に動き出したときよりも、その動きは遅い。

光点の移動にあわせ、地図は縮尺を変え、移動する。常に目標となる二つの光点を捉えるためだ。あまりに地図が広がりすぎると、自動的に光点付近の拡大図が表記される、便利なシステムだ。

「局長。目標のルートを見てください」

モニタの操作盤に向かい、椅子にしていた結城が隣に座っていた浦沢に声をかける。

「ん？」

浦沢がモニタの赤い光点に注視すると、結城はコンソール・パネルを操作した。赤い光点から、尾を引くように光線がジグザグに延びる。犬が移動してきた道順が、光線となって記されているのだ。

「目標の向かう先が一定だな」

アオイに追い立てられ、トラックに飛び乗りしたため光線は右に左にとジグザグに移動しているものの、スタート地点から現在地までの道順が、ほぼ直線で表すことができていた。つまり、彼女には目的地が明確にあるのだ。

「北東の、つまり……」

結城はモニタ上の地図を拡大させ、右上の広大な一角を四角く区切り明滅させる。

「ここを目指しているのではないでしょうか？」

「ふむ……」

浦沢は一息つき、

「確かに、野良犬の行きそうな場所だな」

頷いて言った。

「アオイ君、北東に向かえ。そこに目標の行きそうな場所がある。わかるな？」

「わかりません！」

インカムに向けて言うと、ダメな方向に元気一杯なアオイの声が返ってきた。事に当たる前にアオイには地図を見せているはずなのだが、アオイの頭の中からそれはすべて吹き飛んでいるようだ。もしかして、もとより覚える気持ちはないのかもしれない。周りの人がやってくれると思っているのかもしれない。ダメな人である。

「……山がある。手付かずの自然だ。野良犬には格好の住処だろう」

「はい！向かいます！」

像がふんでも壊れない、頑丈な位置情報端末を開発しなければならなかった、浦沢は本気で思った。位置情報端末は、当然地図機能もある。ただし、アオイはパネル操作だけで端末から火災を発生させたことがあるので、頑丈なだけでは意味がないかもしれない。

『局長！タクシー使ってもいいですか！』

「……未来の紙幣をばら撒くつもりかね？」

『はい！歩きます！』

頭を抱える浦沢の隣で「そりゃそうなるわな」と、結城は苦笑い
だった。

ランニングアウェイ・ストレイドッグ10

目的地まで、あと少しだ。

今日は色々あったなあと、歩きながら彼女は思う。

もしかしたら、人間は少し怖い生き物かもしれないと、彼女は思う。

怖い怖い女の人に追いかけて、宝物をとられかけて。

人間の作った、車というものにも、初めて乗った。

今日はいろいろあったなあと、だから彼女は歩きながら思う。

酷く体が疲れるけれど、それも仕方ないのかなあと、彼女は思う。

だけど彼女は結構能天気で、女の人に追いかけるのは怖かったけど、ちよつと楽しかったとも思っていた。

もしかしたら遊んでくれていたのかなあと、ちよつと思っていた。

だから彼女は、自分の異変についてあまり深くは考えなかった。

いや、どうせ考えても、彼女にわかることでは到底なかった。

このとき、彼女の体は既に……。

ランニングアウェイ・ストレイドッグ11

ガサガサと、アオイは山に分け入る。

「あーもう！」

整備されてない野山は獣道があるだけで、草はぼうぼうに生い茂り、素足にちくちくと刺さる。

「聞いてないですよ局長！」

『想定できる事ではなかったからな』

半袖シャツにハーフパンツという格好をしているアオイは、山登りには不似合いだ。素肌をこれでもかとさらしているのも、草木につつかれて痛いし、虫だつて飛び交っているのである。こんなことになるかわかっていたら、絶対長袖長ズボンだっただろうが、想像していなかつた以上「暑つついのはいや！」だったのである。

「それで！どこにいるんですかあのバカ犬は！」

『もう近いぞ。おそらく安心しきっているのだろうな、動こうともしない』

イライラに任せて言葉が荒くなるアオイを、浦沢は気にもしない。上司であるのに部下からの罵詈雑言になれきっているのも、多少言葉が荒れているくらいでは動じないのだ。

もちろんアオイ以外にはきちんと注意するが。そして浦沢の名誉の為に言っておくと、浦沢はアオイを甘やかしているのではなく、言ってもアオイがきかないだけであるのだが。

「くおら！バカ犬！」

拳を振り上げてアオイは草むらから飛び出した。浦沢が言うにはそこには携帯電話を持った犬が居るはずで、逃げ切ったと安心してゐる彼女を飛び上がらんばかりに脅かそうと思ったのだった。

ところが。

「……局長。様子が変です」

大きな木のそばで身を横たえ、犬は苦しそうに息をしている。携帯電話は口からこぼれたのだろう、口元に転がっていた。

『どうした？』

「なんか苦しそうにすつ転がって、ふうふういつてます」

アオイはしゃがみこみ、犬の頭を手の甲で撫でてやった。犬は薄っすらと目を開けるか、すぐにまた閉じる。ついさっきまで元気に駆け回っていたのが夢のようだった。

『それはもしかしたら、異時間順応だな』

「イージーカム、なんですか？」

全然違う。

『異時間順応だ。君も知ってるだろう』

「あーあー、異時間順応ですね！小学校で習いました」

思い出したかのように、アオイはポンと手を打つ。

『習うわけがないだろう……』

異時間順応は異時間物質に長時間触れていることで体が異時間と同調してしまい、現在時間を異時間と認識してしまう状態のことだ。つまり、この犬は未来世界の携帯電話をずっと持っていることで、自分の存在を未来世界のものと認識を変えてしまい、体が現在の、この世界と合わなくなっているのである。

「知ってます！はい知ってました！」

アオイは浦沢からかいつまんで説明され、元気一杯に答えるが、嘘であることがバレバレだった。

『つまり彼女には、分裂症の初期症状が現れているということだ』

「このこ、死んじゃうんですか？」

『致し方ないことだろう。ともあれ、目標の回収には成功だ。早く帰ってきたまえ』

そのとき、アオイは気がついた。大きな木下に、墓標のように置かれた石に気がついた。

そっと、アオイは墓標に近づく。最近誰かが、何かの亡骸を埋めた

のだろう。土の質感で、小さな穴が掘られ、そして埋められたのがわかった。墓標のそばには木の根をうる代わりにした穴が掘っており、そこにはたくさんのガラクタが仕舞いこんであった。

おそらくは、彼女は携帯電話も、そこに置きたかったのだろう。

「これ、あんたの子供のお墓？」

アオイは優しく、犬の頭を撫でた。苦しそうに息をする母犬は、目を開けてまた閉じる。

子犬がここで死んだのだろう。世話する甲斐もなく死んだのだろう。それを誰かが、優しい誰かが埋葬したのだろう。

そして母親は、子犬のために宝物を集めたのだろう。

たくさんのたくさんの宝物を集めたのだろう。

汚れたビー玉。壊れたロボット。未来世界の携帯電話。

子供のために、宝物を集めてきたのだ。

「あんた、いい母親だね」

同じ母として、アオイは優しく微笑んだ。

どの親も、同じ愛情を子に注ぐ。アオイは奔放で、周囲からはあまりいい母親だと思われていないが、それでもできるだけの愛情を娘に、サエに注いでいるつもりだ。そしてこの母犬も、亡き子に、捧げられるだけの愛情を捧げるつもりなのだろう。

アオイにできることは一つだけで……。

五十年の時を越えるのは、一人と一匹の母親。

ランニングアウェイ・ストレイドッグ 終

事の顛末は、こういうことだ。

ママは犬を五十年前から連れ帰り、我が家の新しい家族として迎え入れたのだ。

一度異時間順応してしまうと、もう二度と元には戻らないそうで、彼女が生き続けるには、これしかなかったのだそうだ。

ママ曰く、彼女は私の二人目のママだそうで、家族の序列における私の立ち位置が変わらないことが少し不満だけど、それもまあよししよう。

私にはそんな些細なことより、時間調停者の規則を曲げてまでの命を救ったママが、何より誇りなのだ。

歴史上重要なものでない限り、過去のものを未来に持ち帰ることは時間軸に影響しないそうなので、浦沢さんは今回のことを黙認しているようだ。

浦沢さんも、ママにはつくづく甘いものである。

あまり甘やかさないでくださいと言ったら、「異時間順応を起こした犬は初めてだから、もしかしたらトラベラー犬かもしれない。学術的に貴重なことなのだよ」と言い訳をしていた。まったく、周りの大人がこんなだから、私がママに厳しくしなければならないのである。

犬はママが馬鹿犬とばかり呼ぶので、彼女はいまや馬鹿が自分の名前だと思っている。だけどそれだとあんまりなので、バツカと名前をつけることにした。

ママはバツカを嫌ってるけど、バツカはママのことが好きみたいだ。あれだけ追いかけられたのに、昨日の敵は今日の友、といったところだろうか。

我が家の小さな庭の片隅には石の墓標と、そして宝物の詰まった箱がある。

携帯電話もきつちりそこに入っていて……。

携帯電話の機種変更を、誰か一人がするはめになったとして、一つの幸せの前に、そんなことは些細なことだと、私は思う。

ランニングアウェイ・ストレイドッグ 終（後書き）

読んでくださった皆様サンキューベイベ！

ランニングアウェイ・ストレイドッグ終わりです。

ご意見感想、手放しの賞賛をイツミンは心待ちにしております。

第4話を引き続き公開して行きますので、よろしゅうな！

じゃーまたー！

ビギン・ザ・ママ 序

物事には、何事にも始まりがある。

今でこそ伝説の時間調停者として名を馳せているママだけど、主によくはない意味での伝説だけれど、そこにだって当然始まりというものがあった。

それは昔のことで、私が生まれるよりも以前のこと、ママがまだ十四歳という私と同じ歳だったころのことだ。

ママ曰く「五年も昔のことではないのよ」だそうだが、悲しいくらいに時間は正確に時を刻み、実に二十三年も前のことである。

私と同じ歳のママは、写真で見ると私とぴったり同じ顔をしていて、髪形までも今の私と同じだ。だけれど悲しいくらいに身長とプロポーションが違っていて……。

当時のことを「振り返らない男はいなかったわ」と言っていたが、それも当然なのかなと思う。

長身で、中学生とは思えない胸とお尻で、無邪気な笑顔で四角い枠に収まってなければ、既に大人の色香を感じさせる美人だったと思う。美人という所に関しては、自分と同じ顔なのでちょっと否定したい所もあるけれど……。

写真にはママの他に、一人男性が写っている。

四角い顔をしたその人は、その後長い間にわたってママから迷惑をかけられることになるあの人だ。

そう、これはママが時間調停者となることになった、きっかけの

ビギン・ザ・ママ 序（後書き）

第四話です。

やっぱり月・金の公開です。

ママの始まりの事件です。

宜しくベイベ！

写真立ての中の写真を見る。

もう随分と古くなってしまった、三人の人間の写った写真を見る。

二十三年と、十年の時を重ねたその写真は、写真立ての中に封じ込められているにもかかわらず、風化してしまったかのように色あせている。

懐かしい懐かしい写真で、大きな思い出が二つもある写真で……。

取り戻してくれたオテンバなあの子は、元気にしているのだろうか？
主人の話では、元気でないことのほうが珍しいようだけれど。

「もういい大人なのに、まるで昔と変わらんよ」

ため息をつきつつも、主人はあの子が職場復帰したことが嬉しそうだ。

私も久しぶりに、会ってみたいとおもった。

最後に会ったのは、赤ちゃんを抱かせてもらった時だから、もう十年以上も前のことになる。

今や娘さんが、あの頃のあの子と同じ歳で……。
「そうかあ」

私は小さく呟いて、写真立ての、ガラスを指で撫でる。

二十三年か……。

あれはもう、二十三年も前のことなのか……。

手を伸ばし、目覚まし時計を枕元に引き寄せる。

時刻を確認した瞬間、その人はがばりと半身を起こした。

淡いピンク色の、ハート柄をあしらったカーテン。窓のそばのベツドの中で、長い髪をボサボサにした少女は頭を抱える。

「うわー！」

時刻は午前八時半。少女の通っている中学校では、後十分で授業が始まる時間だ。

少女の家から学校までは三十分掛かり、身支度の時間を考えればとつくに目が冷めていなければならない時間である。

「ママー！起こしてって言ったじゃん！起こしてくんないからほら！もう目覚しが馬鹿ー！」

布団を跳ね除けて、少女はシャツにパンツだけというあられもない姿でベッドから飛び降りる。

「ママー！」

大声で二階の部屋から叫ぶが、誰も応えない。彼女の両親は既に仕事に行っているようだ。

彼女の名前は鈴原葵十四歳。豊かな黒髪を長く伸ばし、同級生のみならず、下級生から全ての大人に至るまでの男性、はてには同性の視線までもを釘付けにするモデルのようなスーパー中学生だ。

明朗快活で人懐こく、誰とでもすぐさま仲良くなれる彼女は、羨望のまなざしを全身に受けるみでありながら、実は欠点もすごく多い。時間にルーズだとか、成績が悪かったりだとか、考えるよりも手が先に動くだとか……。

そんな葵少女を、両親が起こしたりする訳なかったりする。

大体起こしても起きなかつたりする。

というか起こそうにも、両親は目覚しがる前に家を出ているのである。

郊外から都市部に仕事に通うサラリーマンの悲哀。近所の学校に通うアオイとは違い、遠来の地に足を運ぶ両親は娘の目覚しが鳴る前にそつと家を出ているのだ。……なぜそんな両親にモーニングコールを頼むのだろう、彼女は。

「あーあ、完璧遅刻。でも、まーいっか」

頭をかきながら葵は階段をとんとんと降り、ダイニングに入ってトースターに食パンを突っ込む。

葵はこれから身だしなみを整え、朝食をとり、朝の情報番組をしつかり眺めて家を出る。

家を出るのは九時を大きく回った頃になり、度々このような事態に陥る彼女はだけれど、実は一度も遅刻をしたことがない。中学校生活も三年目になるが、一度も遅刻をしたことがない。

「最近ちょっとやりすぎ。でも、まーいっか」

この日二度目の「まーいっか」を呟く彼女は、時をかける少女。

トラベラーである鈴原葵には、遅刻をなくすことくらい造作もないのだ。

間違いなきよう言っておきますが、これはいつものタイムトラベルママですよ、お気遣いなく。

ビギン・ザ・ママ02

古めかしい瓦葺の、木造の平屋建ての一軒家。背の低い木の塀に囲まれた、物干し竿の置いてある広い庭のあるその家の玄関前に、鈴原葵は立っていた。

いらだたしげに唇を尖らせて、中学生にしては豊かな胸をツンと反らしている。

葵は内心で「面倒くさいなあ」とちよつと思っていた。面倒くさいことになったなあ、と。

時代がかつた平屋の、玄関すぐ脇に設置してある郵便受けをガパリと開ける。そこには平然と、玄関を開ける鍵がおいてあった。

葵はそれを取り上げ、鍵穴に差し込み、ひねった。

小さな手ごたえが伝わり、ロックは解除される。

怪しまれないように、自然な動作を装ってアオイは辺りをうかがった。長い黒髪が小さく揺れる。誰の視線もないことを確認すると、アオイは玄関の引き戸を開けてさつと室内に入る。

しんとして、静かで、かすかな冷気を持っていて、屋内には誰もいないことがはっきりとわかった。もっとも、そうでなくては困るのだが。

「つぶはあ！」

葵はおおきく息をついて、スニーカーを玄関に放り出してあがりこむ。廊下の床板がギシギシと軋んだ音を立てるが、構わずに大まかですかずかと無遠慮に歩いていく。

『もう少し静かに歩けんのか君は』

「中に入っちゃえばこつちのもんでしょ。どうせだあれもないんだし」

耳につけたイヤホンから聞こえた鬱陶しい声を軽くあしらひ、葵は事前に確認しておいた間取りを思い出しつつ、居間の木枠の引き戸を開けた。無遠慮に、思い切り。

レールの上を滑った引き戸はガラガラと大きな音を立て、縁にぶつかってドシンと更に大きな音を立てた。

『この家には今誰もいないことになっているんだ、大きな音を立てるな』

イヤホンから聞こえる男の声は、半ばあきれている。

「はいはいすいません。でもこのくらいの音でお隣さんには届かないんじゃないですかね」

謝辞と皮肉を同時に言つて、葵は居間に一歩踏み込む。

「ふむ」

両手を腰に当て、葵は室内を眺め見た。

畳敷きの、十畳の居間。壁際の台の上にブラウン管のTVが乗っており、部屋の真ん中にはちゃぶ台が置いてある。葵の正面はガラス戸で覆われていて、そのすぐ外には縁側があり、庭になっていた。TVのある壁と逆の壁には部屋の隅に合わせて棚がおいてあり、その上にはケースに入った日本人形が飾ってあった。

「げえって感じ」

葵は舌を出して呟いた。

「ここ、ほんとにあたしと同じくらいの女の子住んでるの？あたしは絶対ヤだ」

スカートを超ミニに改造しているけど、葵は制服を着ている。ただいま中学校三年生で、ただいま侵入中のこの家にも、同じ年配の女の子が住んでいる。

葵には軋んだ床も、薄汚れた畳も、とても仲良くできそうにない。

『時代が違う。仕方がないだろう』

「そーですかね。あたしんちだって生まれる前からあるけど、ここよりずーっと立派だけど」

言いながら、葵は壁際の棚に歩み寄り、引き出しを開けて中を確認した。全部で八つある引き出しの、一つを開けて眺め、そして閉める。

『君の家がどれだけ知らんが、その家はヘタすれば築百年は経っ

ている。古いのは仕方がないだろう』

「へー。ブンカサイにしちゃえばいいのに」

葵は二つ目の引き出しを開け、ちよろつと目をやってすぐ閉めた。
『ちゃんと探しているか？それと、文化財だ』

「あー、そうそう、それぞれ。うん、さがしてますよー」

耳元に届く声に返事をしながら、葵は少しあわてた。話し相手はこちらの動きを見ていないのだが、適当に探していることを見透かされているようだったからだ。

（自由にやらせるとか言つといて、ホントは見てんじゃないでしょ
うね？）

葵は胸中で毒づいた。

『できるだけ急げよ。時間はそう多くはないからな』

「はいはい、わかってますよ」

『はいは一度だ』

「はいー！」

せっかく学校をサボれたのに、教師にずっと見張られてる気分じやんか！葵はぶくつと頬を膨らませた。

おんぼろな一軒家に忍び込み、葵は今探し物の真つ最中だ。トラベル能力を使わされ、知らない人の家に忍び込まされ、泥棒のような行為をさせられている。

面倒くさいことになった。

全く面倒くさいことになった。

時刻は十四時。

タイムリミットは確か十五時だったから、あと一時間。

タイムリミットは、同時にデッドラインだ。

ビギン・ザ・ママ03

時刻は八時二十分になった。空は晴れ渡っていていい天気だけど、十月になって気温は急に下がり、夏の名残はどこかに飛んでしまった。

市立の中学校の中。あくびをかみ殺しながらアオイは廊下をすてすて歩く。

眠い。すこぶる眠い。

ざわざわと話しながら廊下を歩く他の生徒達よりも余計に寝ているのに、葵はすぐ眠かった。

八時半まで寝ていたというのに、すこぶる眠いのだ。

葵は結局のんびり十時に家を出て、八時半に学校に辿り着いた。通学時間マイナス一時間半。

それはつまり時間を越えたということであり、トラベラーでなくてはできないことだ。葵の特権と言うべきものであり、でも飛んだ後は疲労がしばらく抜けないから、損をしているような気もするけど。

「おはよう、葵」

「うはよう」

クラスに辿り着き、級友と挨拶を交わす。眠たげなアオイはぼんやりと手を振り、窓際後方の席に着いた。

「アンタまた遅刻ギリギリだよ」

「大丈夫。遅れなきゃいいんだもん」

葵は組んだ腕を机に乗せ、その上にあごを乗せて既に寝る体制を作り、前の席の女生徒に返答した。本当は遅刻ギリギリどころではなく、どっぷり頭まで浸かりこむほどの大遅刻なのだが。

教室の前のドアが、不意に開いた。朝のHRが始まるまで五分あるのだが、担任の男性教師が教室に入ってくる。いつも彼はチャイムがならないと教室に来ないので、席を立ち談笑していた生徒達はあわてて席に着く。

教壇につくと担任は生徒名簿を教卓に置き、

「鈴原は来てるか？」

唐突に、葵の名前を呼んだ。

「んあ？」

夢の世界においておいでと手招きされていた葵は、ぼんやりと顔を上げる。

普段から名指しで呼びつけられることの多いアオイだったが、朝から注意されるようなことをした覚えはない。

「鈴原、お前今日休みだ。生徒指導室に行け」

葵は目をパチパチ瞬いた。夢の世界に引き込まれる直前だった為、思考が意識についていけない。

「せーと……しどーしつ？」

なんだっけそれ？

頭の中でキーボードをぽちぽち押して、徐々に変換をしていく。

生徒しどーしつ。

生徒指導しつ。

「生徒指導室！？」

がばつと葵は立ち上がる。

勢いに蹴られ、椅子がガラランと音を立てて倒れた。

「あたし留年ですか！？」

大丈夫、中学校に留年なんてものはない。

……余程じゃない限り。

ビギン・ザ・ママ04

生徒指導室は人里離れたところにある。なぜこんなところにと問いたくなるほど、学校の奥の奥にあるのだ。通称「離れ小島」と呼ばれており、不良生徒から、頭为天辺から足の先まで真面目一徹な生徒にまで恐れられている部屋だ。

「失礼しまーっす」

鈴原葵はそんな地獄の門も、あっさりすっぱり簡単に開けてしまふのだが。この少女は一体、怖いものがあるのかどうなのか……。恐怖感とは身の危険を知らせるものであり、それが備わっていないとなれば大変なことになる。もともと、それが非力な一般女性であれば、であるが。

狭い部屋は長机を二脚くつつけた簡易会議机に、椅子が四つしか設備がない。後は部屋の奥に窓があるだけだ。

窓から朝の陽射しを背に受けて、会議机の奥に三脚あるうちの真ん中の椅子から、一人男が立ち上がる。

四脚の椅子は一对三になっついて、完全に面接の様相だ。三人の教師による一人の生徒タコナグリの面接練習が今にも目に浮かんできそうな椅子の並びだ。

「……校長先生？」

入り口近く。葵は首を傾げながら問いかけた。あれ？この人誰だっけ。という表情で。

「君は自分の学校の校長先生の顔を知らないのか？」

「あ、教頭先生？」

「……学校関係者ではない。そんなに歳に見えるか？」

校長先生や教頭先生は、教師の出世街道の頂点付近である。相応の年配者が務めるものであり、眉を寄せる四角い顔の男はまだ若い。「掛けてくれ。話をしたい」

「はあ……」

言われたとおり、葵は椅子に座る。椅子を思いつきり引いて、足をだらんと投げ出して。

「……鈴原葵君、だな？その姿勢は何とかできないのか？」

「はあ、いいですよ。あたし気にしませんから」

「いや、女の子がそんな格好は……」

男が苦言を呈するが、葵はそんなことお構いなしだ。足を広げて投げ出して、手は足の間に置き、思い切り背もたれに背を預けている。

「……私はこういうものだ」

一つ咳払いをして、男は葵の前に名刺を置いた。アオイは腰をくの字に曲げて前のめりになり、名詞を覗き込む。時間管理局・時間調停指揮官、浦沢俊介と書いてある。

「浦沢さん？あたしなんかしましたっけ？」

につこりと白々しいつくり笑顔で、名詞と浦沢の顔を葵は交互に見た。

「よく言えたものだな。君はこの一ヶ月の間だけでも、八度の時間管理法違反をしているだろう？ああ、そういえば今朝もそうらしいな」

法律で認められた一部の官公庁以外では、時間逆行は違法だ。歴史を捻じ曲げる恐れがあるためであり、違反者は厳しく罰せられる。下手をすれば終身刑すら課せられる大罪であり、生まれてこのかた葵は星の数といえるくらい違反している。

「うわちゃー。そういうのって、バレちゃうんですねえ」

「当たり前だ。時間逆行をするたびに小さな時間震が発生することは知っているな？我々時間管理局は当然それを検知している。どんな微細なものであろうとな」

「いや、知んなかったっすね。それどっちも知んかったです」

「……君はひよつとして、本当にバレていないと思っていたのか？」

「こっそりやればバレないのかと……ねえ？」

「……当然バレる。調査した所、君は遅刻の回避程度にしか能力を

使っていないかったのね。見逃していたというわけだ」

「それもそろそろもうダメだってことですか？もうお前に力は使わせないぞ！って？」

「いや、そういうわけではない」

浦沢は葵の前から名詞を回収し、名刺入れに入れて懷に仕舞う。

「今日は君をスカウトに来たんだよ」

まっすぐに浦沢の視線が葵を射抜くと、

「はあ？」

背もたれに体を預けようとしていた葵は跳ね上がるようにして上半身を起こした。ガタンとパイプ椅子が音を鳴らす。

「スカウトって、あたしをですか？」

「そうだ」

「あたし歌下手ですよ！」

浦沢は懷に手をいれ、再度名詞を取り出して葵の前に置く。名刺に書いてある所属を指でトントンと叩き、

「何と書いてある？」

眉根を寄せて、あきれ返った声を絞り出す。

「時間管理局」

「そうだ。アイドルのプロデュースはやってない」

「ですよえ」

けらけらと笑っている。なんなんだこの人。

「時間調停者という職業を知っているね？」

「あ、はい、知ってます」

時間調停者は過去の改ざんを防ぐ為、時間犯罪者を過去に遡って首根っこつかみに行く仕事だ。その職は狭き門であり、さらに高給取りであることから憧れの職業だ。

「知っての通り、常に人材は枯渴していてね」

「いや、それは知んないです」

「……枯渴しているんだ。トラベラーである君ならば、一つ試験をするだけですぐに採用となるんだけどね」

「はあ」

葵は視線をウロチヨロと動かしている。生徒指導室の白い壁に視線を這わせ、何とか面白いことを探そうとしているのだ。浦沢の話には、既に興味がなさそうだった。

「これから試験代わりに一仕事してもらってね、それを見て採用を決めようと思うのだが……」

「あ、それいいです。パスします」

「……かなり好条件の仕事だぞ？実労働時間の少なさの割りに、たくさん金が稼げる。休みも多い」

「いやでも、あたし中学生だし、働くって実感がないですよー。それに面倒くさそうだし」

ぐるぐる回してた視線を浦沢に戻し、えへへへと照れたように葵は笑う。

働くことの実感もそうだろうが、アオイには単純に興味を感じられなかった。それにアオイは、お金だってどうだってよかったりするのだ。今が幸せだから、それでいいのである。

「いいですか？もう。授業あるんで」

アオイは言って、立ち上がった。授業に出たって大半は寝るだけのクセに。

自分の学習能力に既に見切りをつけているアオイには、授業時間は睡眠時間だ。

「そうか……」

「そうです」

「君を逮捕する」

「はあ？」

「忘れたか？君は違法なトラベルを繰り返しているのだぞ？時間調停者にならない限りは、君は時間犯罪者だ。よかったな、その歳でもうこれからの人生を心配する必要がなくなったぞ。死ぬまで檻の中だ」

ブラッくなユーモアを置いて、浦沢も立ち上がった。隣の椅子に

置いておいた鞆を取り上げ、固まったように止まっている葵の隣を歩いて通り抜ける。

「ちょ、ちよつと待ってよ！」

引き戸に手をかけ、外に出ようとした浦沢を葵は引きとめた。

「それってさ、つまり……」

「そうだな。自由と引き換えに仕事を引き受ける、ということだ」
自由気ままをモットーとする葵にとって、その交換条件は考えるべくもないことだ。

一生の仕事を手にして、しかもそれは休暇の多い仕事で、引退も早い。他のどの仕事よりも、自由な時間の量は多い。

取るべきものはわかつているのに、葵は手を伸ばすのを躊躇う。

引っかかるのは交換条件。

自由になる代わりに仕事をしろよ。これがなんとも、ムカっ腹が立つのである。

「む……ぐ……、この卑怯者お！」

ビギン・ザ・ママ05

白いドアをカラカラと開けて、葵はそろっと中に入った。室内は真つ白で、窓の外に見える空の青だけが彩りだった。窓枠の左右に寄せられたカーテンまでも白である。

「あら、いらつしやい」

窓に寄せて置いてあるベッドの上から半身を起こし、二十代半ば頃くらいの女性が葵に声をかけた。女性はお腹がふつくと大きい中に赤ちゃんがいるのだ。

「……どもつす」

入り口付近でぺこりと頭を下げ、葵はベッド近くに置いてある椅子に座った。

総合病院の、個室の病室。

女性は出産準備の為に入院している。ショートカットのさらさらの黒髪を持つ女性は、鼻梁の通った美しい人だ。

「赤ちゃん、産まれるんですか？」

「ええ、もうすぐなのよ」

女性はお腹を優しく撫でた。子供が生まれる前から、女性は既に母の顔だった。女性が母親になるのは、子を産むよりも以前の、お腹に子供がいる時からなのだろう。

「触ってみる？」

女性に言われて、葵はそっと手を伸ばす。入院着越しに触れた女性のお腹は温かく、人肌から感じられる以上の優しさが伝わってきた。

「わー！」

お腹が動き、葵は驚いて手を離す。

「元気でしょう？」

女性は優しく笑った。くすくすと、たおやかに笑った。母親の笑みだと、葵は思った。

「お姉ちゃんにご挨拶したかったのよねー」

女性はお腹の中の赤ちゃんに語りかける。既に子供は生きている存在しているのだ。

「こんなに動くんですね」

「うちの子は特別元気みたい」

「はー。でも、すごいなあ。赤ちゃん、入ってるんですもんね。すごいなあ」

葵はそろそろと女性のお腹を触り、手を離してを繰り返している。嬉しそうに、楽しそうに、「すごいなあ」と繰り返し返している。

子供のように喜ぶ葵を見て、女性もまた嬉しそうに笑った。

「あなたがお守り取って来てくれるんでしょう？」

「あ、いや、それが」

葵はばつが悪そうに頭をかいた。

葵がなぜこの場に来ているのか？実はこの女性の思い出のお守りを、十年前から取ってきてほしいと浦沢に言われたのである。投獄と引き換えに仕事をしろと言われ、しかしまだまだ渋った葵を浦沢は「依頼主に会うだけ会ってくれ」とここに連れてきたのだ。

女性はまだ幼い頃に両親をなくし、祖父母に引き取られたのだが、十年前に家が火を出し、全焼したのだ。

幸い火が出たのは平日の昼間で、怪我人も出なかったのだが、女性の思い出の品は全て消失した。そしてその中に、大切にしていたお守りがあったのだ。

お守りは女性の両親が事故にあい、死んでしまう少し前に買い与えられたものであり、一番大切にしている形見であった。

出産を間近に控えた今、両親の思い出であったお守りが思い出され、初産に不安を覚えた彼女はそれを再び手にしたくなったのである。

少しの間女性と会話をし、アオイは病室を出た。

「どうだ？やってくれないか？」

病室から出ると、ドアのすぐ脇の壁に背を預け、浦沢が立っていた。

「あれは私の妻なのだがね、気の強い性格をしているのだが、なかなかどうして出産というものは不安を感じるものらしい。思い出のお守りがあれば安心できるといっているのだがね」

「会わなきゃよかった。この卑怯者」

ついさっきまで顔に乗っかっていた笑みを打ち消し、葵は浦沢をにらみつけた。

仕事を拒否すれば葵は逮捕、投獄されるのだが、葵のしたことは遅刻の回避程度であり、投獄はトラベル能力を封じる機械を調整する期間だけですむという。

投獄機関は数日から数週間で、それも閉じ込められるとは言え、高級ホテルのような場所で過ごすものだ。

トラベラーで居るのは便利だけど、能力に固執してない彼女はそれでもいいと思っていた。だけど……。

浦沢の持っていた資料を、葵は奪い取る。

「奥さんのためだからね！あんたの為じゃないから！」

ビギン・ザ・ママ06

ガラガラと無遠慮に音を立てて、葵は仏間に侵入した。足の下で畳が小さく沈み込む。

『だから君は、もう少し静かにとっているだろう』

「何言ってるのよ、すごい静かでしょ」

耳元に届いた苦言に葵はつつけんどんに言い返す。実際彼女は静かなつもりだった。フスマを縁にぶつけないよう気を使っていたつもりであり、縁にぶつかれば大きな音が立っていたので、これだいたいと思っっているのである。

仏間は雨戸が締め切られており、薄暗かった。

吊り下げられた電灯の紐を引き、円形の蛍光灯を点灯させる。

「ふむ……」

タンスがあり、押入れがあり、床の間には掛け軸が飾ってあった。先祖の霊は閉められた観音開きの扉の奥で眠っている。

「お仏壇様のお部屋でお守りをしまっって行ったらどこだと思う？」

『それはやっぱり仏だ…』

「お仏壇よね」

聞く耳持ってねえやこの人。何で聞いたんだろう。

葵は観音開きの仏壇をそっと開ける。さすがの葵も、この時ばかりは細心の注意を払っている。仏壇は水とご飯と、

「あ、これ美味しそう」

お饅頭がお供えしてあった。

『食べるなよ』

「食べないっつの」

葵はぶーたれる。食い意地がはっていたって、お饅頭が美味しそっうだからって、人様の家の仏壇に供えられてるものに手を出すような無礼はしない。

（馬鹿なこと言っつなの）

頬を膨らませつつ、葵は引き出しを開けた。引き出しの中には口ソクやマツチ、ライターなどが入っていた。

「お？」

『どうした？』

「お守りつて赤い？」

『そうだ』

「巾着みたいになってる？」

『そうだ』

「安産祈願？」

『……厄除けだ』

「あつたね、これだ」

『……嘘を織り交ぜてくるんじゃない』

奔放すぎる葵に重ね重ね苦言を呈する浦沢だが、

「いいじゃん別に」

葵はまるで聞き入れるつもりがない。

『ともかく、用件は終わったな。回収場所はわかるな？すぐに家を出ろ』

「はいはい」

ひざをついて仏壇を漁っていた葵は部屋を出ようと立ち上がり、そしてその時、それに視線を奪われた。

『鈴原どうした？早くしないと火が出るぞ。いいか？余計なことをしていないで早くしろ』

浦沢が耳元で言っている。

わかっている。

わかっているが……。

これくらいはいいのではないだろうか？

ビギン・ザ・ママ07

「何事もなかったからいいものの、まったく何をやっていたんだか」
ベッドの脇で椅子に座り、腕組みをして浦沢はぼやいた。

とある総合病院の、病室の一つ。

浦沢は妻の病室に見舞いに来ていた。

アオイが十年前に飛び、お守りを取ってきたあの日。目標を手に入れたあの時、最後の最後になってアオイは命令にすぐには従わなかった。何をしていたのかは不明だが、数分の間、まるで硬直したかのように動かなかったのである。

「あれでは、仕事をこなすのは難しいかもしれないな」

「あの子の能力、封じちゃうの？」

「それも致し方ないかもしれん。不採用だよ、あの子は」

浦沢は語調を強くして妻にばやく。

「私は悪くないと思うんだけどな、あの子」

浦沢夫人はベッド脇の台の上から写真立てを手にとり、浦沢に渡した。

優しそうに笑う女性と、寄り添う男性。

そして女性に抱かれた小さな子供。

「その子どもが私。可愛いでしょ？」

「……こんなものがなぜここに？」

「葵ちゃんが持ってきてくれたのよ。全部燃えちゃっただろうから……って」

命令を放棄していたあの数分間。葵はこっそり、幸せそうな家族の写真に手を伸ばしていた。

全てを無くした夫人のため、葵は黙って家族写真を持ってきたのだ。

「これくらいは構わないでしょ？」

「……どうせ燃えてしまっていたものだからな」

「すごくいい子ですよ、あの子は」

夫人は浦沢から在りし日の頃の家族の写真を受け取り、眺め見た。久しぶりに見た、両親の顔。

懐かしむその顔は、幸せそうで、嬉しそうで、淡く輝いているようにも浦沢には見えた。

離れ小島の生徒指導室。簡易型の会議机に、アオイはつまらなそうに頬杖をついていた。

アオイの前には浦沢が座っている。

西日の傾く夕方であり、アオイは放課後の貴重な時間を削られている。

「時間管理局は君を正式に迎え入れることになった。あらためて、これから君と正式に組むことになった浦沢だ」

「そのことなだけどさあ」

葵は顔を起こして浦沢を見る。

「もつすこし考えてもいい？」

「何か気に食わないことでもあるのか？悪い条件じゃないだろう」

「それが嫌なの」

「なに？」

「お金はたくさんもらえるし、学校は時々サボれるし、いいことばっかりだけどさ。それって結局、変なことさせないためにお金で能力を買うつて事でしょ？そういうの好きじゃないし」

葵はぶちやむくれている。

世間に役立つ仕事であり、実は結構任務も楽しかったが、なんとなく心の中で折り合いがついていないのであった。利用されているなあと思うのであり、この鈴原葵と言う人は、そういうことが嫌いなのである。

「そうか……」

浦沢が腰を上げ、パイプ椅子が小さく悲鳴を上げた。浦沢は背後の窓に歩み寄り、外を眺め見る。

「恥を忍んで言うが、妻の一番の笑顔を、今日見たよ。あんな笑顔は初めてだ」

「へえ」

「君のおかげだ。君の持ってきた写真のな」

「そ、よかったじゃん」

「君のような人間にこそ、私はこの仕事をしてもらいたい。人情が必要なんだ、時間調整にはな」

夕日に染まった雲が流れていく。カラスが飛んでおり、そろそろ帰路につく時間だ。

浦沢の背後で葵は再び頬杖をつき、

「あつそ」

照れ隠しの不満げな顔で、小さく呟いた。

ビギン・ザ・ママ 終

結局ママは、そのまま時間管理局にお世話になることになった。

浦沢さんが最後に言った言葉がママの背中を押すことになったのは言わずもがなであり、本当は小躍りしたくなるほど嬉しかったのだそう。

当時は反抗期が来ていたらしく、帰り支度を終えて校門出るまでは我慢したらしいけど。

最初の仕事から迷惑をかけてしまっていて、娘の私としてはとても申し訳がない。

無邪気な顔で浦沢さんに飛びついていているこの写真は、時間調停者の認定証を授与された直後に取られたもので、ママはこのあと仕事の邪魔になるからと長い髪をばつさり切ってしまったそう。それ以来、ずっとショートヘアで通しているらしい。

ママには武器が他にもあるから、ロングヘアという女性の最大の武器（と私は思っている）をあっさり捨てられたのだろっとなあと、私は思う。私が同じ立場ならば、この髪だけは絶対に切らないけれど。

ママにとってはこの事件が人生の転機であり、とても幸運だったと言っている。

私にも転機になるような出来事が、いつか来るのだろうか？

ママのような良い出会いが来てくれればと、私は思う。

ビギン・ザ・ママ 終（後書き）

読んでくださった皆様サンキューバイベ！
ビギン・ザ・ママ終わりです。

まだまだ続くんですが、よろしくお付き合いいただけたらと思います。

そんじゃーまた！

ストップタイム・ムービングワールド 序

分解症というものがある。

それは発症してしまえば致死率が100%という、とんでもない病気だ。

タイムトンネルが発見され、時間遡行が可能になった昨今。分解症の症例は、初めて見つかった。けだるさを覚える、風邪のような初期症状に始まり、果てには身動きが取れなくなり、文字通りからだ分解されて消えてしまうという病気、それが分解症。

学者さんたちが言うには、異時間に触れることで、自分の属する時間が通常時間が異時間が判らなくなり、その齟齬によりどちらに存在していいかわからなくなり、発症する病気のようにだ。

つまりトラベルを行わなければ発祥するはずのない病気であり、逆に言えば異時間に触れる機会の多いトラベラーには切っても切れない病気だということである。

異時間に触れた時間が長ければ長いほど発祥する危険性は高いところで、異時間に接していれば、発症しない人間はいないそうだ。

分解症は人によって発症するまでの時間に違いがあり、平均値は出ているものの明確な発祥の予感はない。時間調停者が大体三十代で引退となるのは、そもそも分解症の危険性があるからである。

ママが引退になったのも、つまりそういうことなのだ。

だけれどママは復帰を選択し、より長い間異時間に接してしまっただけで……。

これは分解症にまつわる、ママと私と、ママの二人の命の恩人の話。

ストップタイム・ムービングワールド 序（後書き）

しばらくぶりですこんちゃーす。

第五話始まりました。

よろしくバイベー！

ストップタイム・ムービングワールド01

銀行強盗が女子高生を人質に取り、廃工場に立てこもるという事件があった。それは二十年も前のことで、警察の到着前に犯人グループは組み伏せられてしまったのだけれど、なんと事件を解決したのは外国人の少女だったらしい。

それがなんなのかって？そういうことがあったなと、ただそれだけだ。

『一人目はヒザの裏と側頭部を殴られている。ヒザ裏を殴って体勢を崩し、その後側頭部だね』

『どうすればいいですか？やったことありあませんよ』

『思い切りやって大丈夫だよ。どうせ女の子の力だし、犯人は誰も死んでいないんだ。すんだことだから、大丈夫』

大丈夫だと二回も言われた。

私はそつと忍び込み、手近な位置に転がっていた樹脂製のパイプを拾い上げる。

「いやあ！」

背中を向けている男の人の左足のヒザの裏に、私はパイプを打ち込んだ。

「うあ！」

男の人はヒザを折って体勢を崩す。その隙を突き、私は男の人の頭にパイプを振り下ろす。男の人は動かなくなった。

「死んじゃったかも……」

『気を失っただけだよ。大丈夫さ』

手がぶるぶる震えて、怖いけど、なんだかちよつとスッキリしたような気もする。

いやいや、そんなことはない。

私は暴力的な人間ではない。

「角を曲がったらすぐに二人目がいるぞ。気をつけて」
喉がカラカラに渴いている。

耳元に届いた声に頷くのも忘れ、私はパイプを握る手に力を込めた。

1

季節は冬になり、時々雪が降るようになった。

申し訳程度の庭のある、都市型の狭小住宅。洗濯カゴをぶら下げて、井原葵は庭に面した部屋の窓のそばにやってきた。

窓のそばに洗濯カゴを置き、葵はスラッと窓を開ける。棘のあるような冷気が瞬時に流れ込み、まるでちくちくと刺すようだ。

「ふわー、寒くなったねえ」

ダウンジャケットなんぞを着こんで防寒対策万全の葵が、ぶるると身震いをし、自分を抱きながら言った。空は抜けるように晴れているのに、遠く離れた太陽は、ぬくもりを届けてはくれない。

サンダルを突っかけて、葵は庭に出る。狭い狭い庭の隅の犬小屋から、バツカが飛び出してきて葵の足にまわりついた。

「こーら！忙しいから後にしなさい！」

後にと言っておいて、この人は絶対に遊ばないのに、バツカは葵に一番なついている。散歩に連れて行くのも葵ではなく紗枝なのに、紗枝よりも葵になついている。

洗濯カゴからタオルを取り出し、葵はパアンと音を立てて水気を払う。微かにはじかれた水分が、洗剤の清浄な香りを葵に届ける。

珍しく葵が洗濯をしているのには理由がある。実は葵の愛しい旦那様が、このたび一時帰国する事になったのだ。長期の海外出張でめったに帰らない旦那様の為、葵は掃除洗濯を徹底しておこうというのだ。

なんともかいがいしい奥様だ。

…… 本当の所は旦那様が帰ってくるまでに、溜まりに溜まった家事を片付けようと思っっているだけなのだけれど。

なんせ旦那様が帰ってくるのは一週間後で、ちまちま葵はお片づけをしようというのだ。

それでも娘任せにしないで自分でやろうというところが可愛らしい所だけれど。

「んー、ちよつと熱っぽいかな」

洗濯カゴからは次々とタオルが出てくる。物干し竿は、一面のタオル畑だ。どうやら溜まった洗濯物の、タオルを重点的に片付けようとしているようだ。

葵は手の甲で額を押さえる。

なんだか体がだるく、風邪でもひいたかなと、葵は思った。そういえばここのところずっと、なんだか調子が悪いような気がする。

その症状が意味することに、葵は気付いたか気付かなかったか。

庭で倒れ、苦しそうに息をする葵を紗枝が見つけたのは、数時間の後のこと。

葵の誕生日の、みんなでパーティーをしようと約束をした誕生日の、一週間前のことだった。

ストップタイム・ムービングワールド02

真っ白なベッドの中で、葵は静かに呼吸をしている。胸が上下に運動し、寝息は穏やかそのものだ。右腕からは点滴の管が伸び、左手の手首にはバンドがつけられている。

布団もはだけず、ベッドから足もとび出さず、姿勢よく眠っている葵を見て、紗枝は不思議に思った。ベッドのそばで椅子に座り、寝相のよい母を不思議に思った。

静かに眠っている。

発見当初は息も荒かったが、今は穏やかだ。鎮静剤が効いているのだろう。

学校から帰ると、庭のほうでバツカがやたらめったら吠えていた。普段大人しいバツカが騒がしいので、紗枝は不思議に思い庭にいくと、そこで葵が倒れていた。

あわてて駆けつけると、アオイは「大丈夫だから」とか細い声で発し、そしてそれきり押し黙ってしまった。

紗枝は震える手で電話のボタンをプッシュし、救急車を呼んで、病院まで来た。当然制服のまま、なおかつ庭にヒザをついたのでスカートが少し汚れてしまっている。

背後でドアの開く音がした。振り返ると、四角い顔の眉を真ん中に寄せた浦沢がそこにはいた。

浦沢はベッドにより、紗枝の隣にある椅子に腰掛ける。

「分解症らしい。一年なら復職しても大丈夫だと思ったが、読みを誤った。申し訳ない」

「ママ、死んじゃうんですか？」

分解症は発症すれば致死率100%だ。今現在、分解症を治癒することはできない。治療のできない、不治の病だ。

「いや、初期症状は出ているが、まだ発症していない。だから助け

ることができるのだが……」

「トラベラーとしての力は無くなっちゃう？」

「ああ、そうなる。本当にすまない。私のせいでお母さんが……」
浦沢が頭を下げると、

「よかったあ」

おおきく息をつき、紗枝は目頭を拭った。緊張にあふれていた表情から、ほっとした顔になる。

「ママ、助かるんですね？」

「ああ。時間を固定する薬があるから、それを投与すれば大丈夫だ。今も特殊なバンドで発症を遅らせている」

分解症は通常時間と異時間でどちらの時間に属していいか体が戸惑うことで起こる病気なので、体を通常時間に固定させてしまえば発症することはない。時間を固定させる薬が今はあり、分解症は発症すると治療は不可能だが、発症をさせないことはできるのだ。

ただし時間を正時間に固定する為、時間跳躍は不能になる。つまり、トラベラーとしての生命を絶たれるのだ。

この薬は時間犯罪者になりえるトラベラーの能力を封じるものとして開発されたのだが、むしろ主に分解症の発症を防ぐために使われている。

「いやしかし、葵君はトラベラーとしての自分に誇りを持っていて……」

「あんなの誇りじゃありません。子供のおもちゃなんですよ、ママにとつてのトラベル能力は。遊んでるだけなんです」

すこやかに眠ってる母の顔を紗枝はぺちつと叩く。無事と判ればこれである。母親の豪快さはないが、紗枝は紗枝でやはりこの母の娘だ。

「んん、ごめんなさい」

寝ているのに怒られたのがわかったようだ。葵は微かに表情を苦しくし、もぐもぐと寝言で謝っている。

「もう局長さんにご迷惑かけることもなくなるんだし、いいことな

んですよ。今まで母をありがとうございました」

ピシッと背筋を伸ばし、四十五度の角度で紗枝は浦沢に頭を下げる。

「いや、こちらこそお母さんには大変世話になって。ありがとう」

浦沢もまた、紗枝にピシッと頭を下げる。

「良くなるのなら安心です」

サエは言って、葵の髪を優しく撫でた。相変わらず母親のような娘である。

「効果を得るのに五年は必要だから、誰かに過去に飛んでもらうことになるがね」

「ああ、最後にまた迷惑かけちゃうんですね、すいません」

「こちら側のミスだ、仕方ないよ」

「すいません、お手数かけます」

「そのことなんだがね、ウチが慢性的に人材をからしていることは知っているね？」

「はい」

「新たな人材確保の為に、君にやってもらおうかと思っているのだが」

「はい」

実を言くと、紗枝は話を右から左に聞き流していた。母が助かることを知った今、何時間かの緊張が過ぎ去り、呆けていたのだ。

だから今、浦沢が言ったことを理解するのに時間がかかった。

「……はい？」

今この人は、私にやれといったのか？頭の中で出来事を撒き戻し、浦沢の発言を思い起こす努力をする。

「君にやってもらいたい」

絡まったカセットテープのように、紗枝が撒き戻しに時間をかけてるうちに、浦沢はもう一度同じ事を言っていた。どうやら聞き間違いはなかったようだ。

「私ですか!？」

自分を指さし、紗枝は頓狂な声を出す。

母の持ったバトンがまさか、自分の手のひらにポンと載るとは、紗枝は思ってもみなかった。

ストップタイム・ムービングワールド03

あれはいつ頃のことだったか。

紗枝は回想していた。

そう、あれはたしか、小学校に上がる前のことだった。

どこだかわからない場所に、気がついたら居た。

そこは見たことのない田舎町で、幼い紗枝にとっては見るもの全てが恐怖だった。

見知った街でさえ、一人歩きには不安を覚える幼き日。覚えのない町並みは巨大に見え、屋外にいるというのに閉塞感を覚えたものだった。

葵が迎えに来るまでの間、迷子になった紗枝は泣きじゃくっていた。葵の胸に抱かれた後も、安心から堰を切って涙があふれたのだが。

「あれは私が時間を越えていたんですね」

『それを葵さんが助けに行ったというわけか』

紗枝の耳に、結城の声が届く。

サエは思ってもいなかった。自分がトラベラーの血を引いていることなど。

幼いあの日。力の使い方を知らない紗枝は、知らないうちにタイムトンネルに穴を開け、過去に跳躍していたのである。

見知った街から突然知らない世界に行ってしまったのは、つまりそういうことなのだ。

紗枝の右手首で金属製のリングがしゃらんと揺れる。これはトラベル能力が暴走するのを抑制する為の装置だそうで、思えば迷子になったの日以来付けさせられている。

子供の頃から力を自在に操れた母と違い、紗枝は力の使い方が判らなかつた為、半ば力を封印されていたというわけなのだ。

自分がトラベラーだったことなど、だから紗枝は全く知らなかつた。

実は母である葵だけでなく、祖母までもトラベラーであることを、紗枝はやつと知らされた。

ファストフード店のカウンターの中。

フリフリのエプロンドレスを身につけた、メイドのようなちびっ子店員。

メイド服のようなデザインの制服を採用している、珍しいファストフード店に紗枝は潜入していた。

左手の手首でも、同じようなリングがしゃらんと揺れる。こちらを力をもく操れない紗枝のため、トラベルする際の補助になる装置だ。

「今」は二十年前の冬。分解症の症状を覚えた母を助ける為、紗枝は時間管理局の要請の元時間跳躍をしてきたのだ。

制服であるエプロンドレスのポケットの中には、葵用に調整された時間固定化剤のカプセル薬がある。この薬がじわじわと時間をかけ、通常時間からずれた葵の時間を固定するのだそう。

「君に行ってもらうからには、君の生まれる前に行ってもらう。向こうで君は葵君と直に接触するわけだから、正体がばれないための念のためだ。もちろん変装だっけてしてもらう」

「それでどれくらい前に行くんですか？」

「二十年前だ。二十年かけて効果が出るように、薬を調整している。トラベル回数によっても薬を調整しなければならぬから、既に仕事をしているこの頃がちょうどよいとされたよ。トラベル回数はしっかり記録されているからね」

「バレてはダメなんですよ？でも、理由を言っただけで薬を飲んでもらうわけにはいかないんですか？既にお仕事してるんだし、わかってももらえるようにも思えるんですけど」

「それはダメだよ。彼女にそれを知らせた事実はないんだ。歴史が変わってしまう。何の薬も知らせずに飲んでもらいたくないんだ」

というわけで、二十年の時を遡り、紗枝は実の母親を騙し討ちす

る事となつたのである。

カウンター正面の自動ドアが開き、さらさらのショートヘアをなびかせて女子高生時代の伊原葵、いや、鈴原葵が入ってきた。冬だというのに制服の上に学校指定のセーターを着ているだけで、スカートは超ミニのままである。ソックスもヒザまで、

（この人は寒くないんだろうか？）

と紗枝は思った。しかしながら、背は高く、胸もお尻もどんと張り出している。自分と同じ遺伝子を本当に持っているのだろうか。紗枝は目の前の葵に対して思った。もしかして自分は父親の遺伝子しか継いでいないのではないだろうか。

現在紗枝は十四歳。目の前の葵は十七歳。僅か三年でそこまでの急成長などする見込みはない。そうなってしまうえば、成長どころか進化だ。それを考えれば、母親の遺伝子はどこか遠くに飛んでしまったと考えるても不思議ではない。

「いらつしやいませ！ドリンクと一緒に、こちらのお薬はいかがですか？」

今日はなんにしようかなーと、指をくわえながらほくほく顔でメニューを眺める葵に、紗枝はアルミフィルムで包まれたカプセル薬を差し出した。ファストフード店特有の、ゼロ円スマイルを顔一杯に湛えて。

「……は？」

きょとした顔で、葵は紗枝の顔を覗き込む。

「ご一緒にお薬はいかがですか？」

もう一度言ってみた。笑顔がひくひく引きつってしまう。冷や汗が一筋、つーと頬をつたって落ちていった。

「いえ、危ない薬ではないです。当店のお勧めで、新製品なんですよ」

そんなわけではない。どこのファストフード店が「お客様に健康になつていただくために、薬を提供してはどうだろうか？」となるのだろうか。ジャンクフードは体に毒だから、とでも言うのだろうか。

それならばファストフード店など畳んで野菜ジュース専門のジュースバーでも開店すればいい。

「……なにゆってんの？」

怪訝な顔で葵は首を傾げた。

そりゃそうだ。

葵が下校時にいつもこの店でドリンクを買ってから帰っていたことを知った結城が立てたこの作戦は、当然ながら失敗だった。始まる前から紗枝には判りきっていた。

「ちよつと、君」

スーツ姿の男が紗枝の肩を叩いた。先ほどから店内では「あの子誰？」とひそひそ店員達が呟いていたので、誰かが責任者を呼んだのだろう。

『ヤバイ、逃げる紗枝ちゃん』

結城の声を号砲に、紗枝は脱兎のごとく駆けだした。

「おい！」

大声で呼び止めるスーツの男を尻目に、店内につながる通路の薄い板を跳ね上げ、自動ドアをくぐって店の外へ。

きらきらゆれる長い金髪。焦りの見える瞳は青い色で、傍目には洋ロリの様相だ。ちなみに名前をエリカ・フォンティーヌとつけられている。なんだそれ。

「ひゃっ！」

葵のそばを通った時、ぶつかったような気がしたけどそんなこと気にしない。気にしていられない。

あらかじめ隠しておいた逃走用の自転車を駆り、自転車禁止のアーケード街を紗枝は疾走する。自転車禁止の立て看板をやり過ごし、競輪選手のような立ち漕ぎで全力疾走。青と白の縞々パンツが見えそうなほどスカートがなびいている。

アーケード内では自転車を押して歩きましょう。

ストップタイム・ムービングワールド04

一級河川に架けられた大きな橋の下。ダッフルコートと綿のパンツを着た紗枝はしゃがみこみ、自販機で買ったホットココアのプルタブを開けた。

汗に濡れて、体温が奪われている今、ホットココアの温かさが心地よい。

そばに止めてある自転車のカゴに、黙って拝借したファストフード店の制服が入ってある。この後コンビニの配送受付サービスで借り受けた店に配達してもらう。紗枝には洗濯をしておけないことがとても心残り……というくらいいらしてむしゃくしゃすることだが仕方がない。洗濯なんぞをしている暇はない。

「こんなことで薬飲ませられるんですか？」

言いながら、紗枝はレンガ敷きの地面に足を投げ出した。息を吐けば、あっという間に白くなる。

『僕にも分らないよ。初めてだし、どうなるかなんてさ』

「ママは大丈夫なんですよね？」

『局長がついてるよ。それに葵さんはトラベラーだけあって、分解症にも多少耐性があるようだ。少なくとも一週間は大丈夫だろうって』

「誕生日が命日だなんてことになるのは嫌ですからね」

『それは僕もだ。もうプレゼントまで買ってしまっただから』

手の中でホットココアをもてあそぶ。熱いほどだったそれは、気付けばもう温くなっている。

「命にかかわってるんですよ？ いやだな、なんかちょっと怖い」

『今は安定してるから心配はないよ。それに僕たち仮免許の仕事は二日間だけ。それを過ぎれば本職のベテランが出動するから、葵さんの命の心配は要らないと思うよ』

紗枝はココアを一口飲んだ。缶を通しては温くなったと思ってい

たが、中身はまだ温かい。程よい甘さとわずかな甘みがちょうど良かった。

コンビを組む井原紗枝と結城重幸は、採用試験の真っ最中だ。時間管理局は人材確保の為、井原葵救出のこの仕事を、まだ登用されていない二人に任せているのである。この試験如何で紗枝は時間調停者に、結城は調停指揮官に登用されるのだ。

『まだまだ作戦はあるさ。ティッシュ配り作戦、街頭アンケート作戦、食事に混入するという案もあるぞ』

「毒を盛るみたいじゃないですか」

どれもこれも成功見込みのなさそうな作戦名に、紗枝はため息を余儀なくされた。

大体、食事に混ぜて気付かずに飲み込む人間はまずいない。犬だって気がついて吐き出すものはいるのである。葵は犬以下か！……まあ、多少の違和感は気にしないような人だとも思うけど。

（この人ダメかもしれない）

人生の半分をひきこもって生きてきた結城重幸。社会復帰を果たしたといえ、世間に疎いのは仕方がない。トラブルマシンを自作するような頭腦の持ち主だが、実はそれ以外は全く平均的なので、世間知らずの点でマイナスばかりを稼いでいる現状なのだった。

「ヘクシヨン！」

悪い噂が二十年の時間を経て伝わり、指揮所で一人、結城はくしやみをした。

緊迫感のないまま、採用試験の一日目は終わっていく。

ストップタイム・ムービングワールド05

昼時晴天小春日和。とある私立高校の学食は、生徒達で混雑していた。カウンターでメニューを受け取るセルフサービスの学食で、奥ではおばちゃんたちが大きなお鍋をかき混ぜている。

「……あんたねえ」

鯖味噌定食の食券を持った手で、葵は頭を抑えた。

カウンターの上のトレイには、鯖の味噌煮と、お味噌汁と、サラダと、大盛りのご飯と、それと小皿に載ったカプセル薬が。

「危ない薬じゃないですよ？」

割烹着姿の洋ロリ……通称伊原紗枝はにこりと微笑む。

「そういう問題じゃないでしょ？ いい加減うんざりなの」

この日、朝から葵は紗枝につきまとわれていたりする。学校に行くために電車に乗ろうと駅に行くと、「ご協力お願いします」の声と共にカプセル薬と献血のお知らせのティッシュを貰い、学校の前では「街頭アンケートにお答えいただくとなんとプレゼントが！」と薬を渡され、そして昼にはこれである。ちなみにアンケートも献血の意識調査であり、アオイは「どうでもいい」と一言書いておいた。なぜ献血にこだわるのか。

「出稼ぎ外国人だから日本があまりわかってないの？日本じゃデザートに薬は飲まないの。プリンをちょうだい。大人のデザートはプリンよ」

そんな大人聞いたこともない。大体鯖味噌定食にプリンはつかないので、ほしければ別に買わなければならない。

「デザートじゃないですよ？ちゃんと薬効がありますから」

「そんなのわかってんの。皮肉よ皮肉。あとカッコーがなに？卵産んだの？」

「おいお前、ここで何してる」

話に突然、竹刀を持ったジャージの体育教師が割り込んできた。

どうやら紗枝はまたこっそり侵入したようだ。

「あんたまた黙って入ってきたの？」

もはや葵はあきれるばかりだ。

『紗枝ちゃん、逃げ……』

「先生さ、この子あたしの知り合いなんだ。勘弁してもらえます？」

耳元で結城が言い終わる前に、葵が助け船を出した。

「日本に来て短いんだ。それに子供だしさ。いいですよね？」

言って葵は眼下の金髪を撫で回す。

「遊びたかっただけなんだよね？」

まるで子ども扱いである。

「……うん」

葵に乗っかって、紗枝は頷いておく。

しかしそれにしても、葵が紗枝のことを子供と扱うのは久しぶりのことだ。今では紗枝の方が葵を子ども扱いしている。

「仕方ないな、今日だけだぞ」

竹刀でぼんぽんと肩を叩き、ジャージ姿の体育教師は引き下がっていった。岩石ゴリラのような見た目をしている割に、理解のある先生のようなだった。

ストップタイム・ムービングワールド06

「ほい」

校舎裏で紗枝がヒザを抱えて座っていると、葵がやってきてパックジュースを差し出してきた。いちごみるく味で、紗枝も好きなものだ。

「……ありがとう」

うつむき加減だった紗枝はいちごみるくを受け取り、パックの背中についたストローを差し込口に差し込む。小さな手ごたえを伴い、アルミフィルムに穴が開く。

葵は紗枝の隣に豪快に胡坐をかいて座り、バナナ・オレのパックにストローを差し込んだ。

「ご飯食い損ねちゃった」

「……ごめん」

「いいよ別に。よくあることだし」

昼休みの真つ最中。学食から紗枝を助け出した葵は、人気のない校舎裏まで紗枝を避難させていた。

「何で助けてくれたの？」

「なんかかわいそうだったんだもん。それに悪い子じゃなさそうだし。なんかわかるんだ、そういうの」

「……ごめん」

「あー」

葵はわしゃわしゃ髪をかきむしり、紗枝の方を向くと両手で紗枝の顔をつかみ、親指で口の両端を持ち上げた。

「暗い！笑うのこういうときは！そしてごめんじゃなくてありがとう！」

十七歳の鈴原葵は、やはり伊原紗枝の母親である井原葵だった。若干（二十年も経つのに若干）若いが、やはり同じ優しい井原葵だった。豪快で、破天荒で、優しい。

「ありがとう、マ……」

ママと言いそうになり、あわてて紗枝は口をつぐむ。

「よし、それでいい」

葵はにいと笑った。人懐こい笑顔も、やはり変わりがなかった。

それでいて色気を感じさせるところもあるのだから、神様は卑怯だ。

「なんか知らないけどさ、子供がワケわかんない薬に手を出しちゃダメよ。もうお家かえんなさい」

アブナイ薬みたいに言っている。そんなのではなく、葵を救う薬なのだけれど。

その時、サイレンの音が聞こえてきた。音はだんだん近くなり、そしてまた遠ざかっていく。

「なんかあったのかな？」

「あんたを捕まえに来たんじゃない？」

「うそ！やだ……」

「冗談よ。なんか銀行強盗があつたみたいでさ、犯人が逃げてるんだって」

葵はバナナ・オレをずずずとすすする。中身の少なくなったパツクがぺこんと音を立ててへこんだ。

紗枝はストローを差し、そのまま口をつけていなかったいちごみるくを一口飲んだ。よく買ってもらっている、いつもの味だ。ほのかな酸味と、濃厚な甘み。不思議と笑顔になる。

「お、いいね。もう一本いつとく？」

「いいよ、そんなにたくさん飲めないもん」

ふとした瞬間、しがらみはほどけ、校舎裏は花が咲いたように笑い声に満ちていく。

ストップタイム・ムービングワールド07

分厚いコートを着て帽子を被り、サングラスをかけ、マスクをつけた小さい人影がこそそと道を歩いていく。通りかかる人がぎょつとして振り返る、アニメの銀河鉄道999の車掌さんのようなヘンテコな格好。

「なかなか思うとおりに行きませんね」

電信柱の物陰に隠れ、車掌さんはサングラスをくいと持ち上げて視線の先に目標を捕らえた。当然本当は車掌さんではなく、伊原紗枝の変装だ。典型的な追跡スタイルだということらしいが、道行く人は異様さに皆々振り返っている。追跡者がこんなにもバレバレでいいのだろうか。

視線の先には冬だというのに薄着で元気な女子高生、鈴原葵がいる。街中をすてすたと歩き、カップジュースをストローでするずる啜っている。ちなみに中身はコールドリンクだ。氷もたつぷり入っっていて、寒くないのかあの人は。

『慎重にいくしかないかもしれないね』

「でも、今日中に飲ませられないと、結城さんは指揮官になれないんですよ？」

『そうかもしれないけど、でも怪しい薬と思われるみたいだからねえ』

インカム越しに結城の苦笑いが届いてくる。

食堂での一件で距離は近づいたようだが、葵は薬を飲むことは頑なに拒否した。紗枝はどうやら、違法ドラッグのバイヤーか何かだと思われるようだった。

ダメ、ぜったい。

麻薬だなんだというのなら、そういう葵の言い分もしっかりわかる。けれど、これは時間固定化剤で、葵の分解症を発症させないようにするものなのだ。何とかしなければいけない。

「ベテランさんが来れば何とかなるものなんですか？」

『それは医師を装ったりね。いろいろと装備もあるんだよ』

「……それ私たちでもできませんか？」

『登用試験はなるべく自分達で何とかするのが通例らしい。臨機応変さをはかるとかなんとかの理由だってさ』

「なんかわかるようなわからないような感じですね」

身を低くして、こそこそ葵を追いかける紗枝。道行く人の視線はずっと彼女に集中しており、これでは通報されても弁解の仕様がなない。偽造の身分証明書は持っているが、身元引受人がどこにもいない家出少女だ。

『紗枝ちゃんは調停者になりたくはないのかい？』

「私ですか？」

どうだろうかと、紗枝は思う。今回は請われて試験を受けることにしたが、自分は時間調停者になりたいだろうか？

仕事はほとんどデスクワークで、事件の解決に出動するのは稀だ。余程の事がなければ定休で、十七時には職務が終わる。ひとたびミスをすれば世界が無くなるかもしれない重圧のある仕事だが、それさえなければキツい仕事ではない。何より給料はよく、引退も早い。引退した後は特別年金も支給される。

『やっぱりこの仕事は嫌い？』

結城はどうやら、葵と紗枝の母娘のことを良く知らされているようだ。

昔、紗枝は母親の仕事が嫌いだった。

父親は海外出張で、母親も仕事をしていて、祖父母の家で借りてきた猫のような生活をしてきたのだ。祖父母に迷惑をかけるようなことをしないいい子であり、かといって普段いない母に、距離のとり方を戸惑い甘えられず、孤独な時期を過ごしてきたのである。

それに気付いた葵が書類仕事をすつ飛ばし、ことあるごとに紗枝にちよっかいを出すようになってからは、関係は改善されたが。

おかげで葵が紗枝に甘えるようになったのだが、それはそれで紗枝

にはうれしいことだ。

もっとしっかりしてもらいたいとは思っけど。

「嫌いじゃないですよ」

はつきりと、紗枝は主張する。

昔は嫌いだった。けれど、今は嫌いじゃない。

時間調停者は正義のヒーローだ。世界の破滅と日夜戦う、スーパーヒーローだ。

円満な家庭を守りつつ、地球を救う母を、紗枝は実は誇りに思っている。

それに……、

「ママってすごく頼られてるんですよ。それはすごく、カッコイイと思います」

職場に連れて行ってもらったとき、職員はみんな口々に紗枝に言った。

「あなたのお母さんは、なんでも解決してくれる」

みんな口々に言ったのだ。

伝説の時間調停者、井原葵がデスクワークを放り出しても文句のひとつも出なかったのは、彼女が名実共にスーパーウーマンだったからである。時間犯罪者達は大抵大きな苦しみを抱えているものなのだが、葵は「事件はもとより心も救う」と評判だったのだ。

『それ葵さんに言ってあげてよ。葵さん、紗枝ちゃんに尊敬されたみたいだから、飛び上がって喜ぶよ』

「想像出来ちゃいますね」

飛び上がって成層圏を突破し、人類初の単身宇宙旅行まで成し遂げてしまった母親の姿を、紗枝は本当のこのように想像できた。きっと葵は帰還時の大気の摩擦をもともせず、タコに似た火星人をお土産に持ってくるに違いない。

紗枝の追いかける前で、葵はどんどん人気の無い方向に進んでいく。

街と街との間隙の、機能していない工事現場。奥することなく、葵はひよいひよいと足を踏み入れる。

「……あの、これって……」

『通常の下校路みたいだよ。信じられないだろうけど』

まだ夕方になったばかりなのに、雑草だらけのそこには人影が全く無い。葵は「こっちの方が近いから」と駅までの直線距離をたどってるのだろうけど、普通女子高生は立ち入らないような場所だ。というか、そもそも誰も立ち入らないから無人なのだ。

怪談などの舞台になりそうな場所であり、刑事ドラマなんかで犯人が逃げ込みそうな場所であり……。

隠れる場所も多いので追跡には便利だが、紗枝にはちよつと怖かったりする。

そんな場所に珍しく、徐行運転の黒いワゴン車が物陰から現れた。ワゴン車は葵に近づいていく。

行く手を遮られた葵が立ち止まると、後部座席のスライドドアが開き、中から目だし帽をかぶった二人の男がとび出した。男は二人がかりで葵を車内に連れ込んだ。

「あっ！」

紗枝はあわてて物陰からとび出すが、ワゴン車は発車し、速度を上げて工事現場を出て行く。

「大変！ママが！」

『どうした紗枝ちゃん』

「ママがさらわれました！」

紗枝は懸命に走るが、人の足で自動車に敵うはずも無い。ましてや紗枝は十四歳の少女であり、同年輩から見ても小柄なのだ。

紗枝の眼前で、葵を乗せたワゴン車は姿を消していく。

ストップタイム・ムービングワールド08

銀行強盗が女子高生を人質に取り、廃工場に立てこもるという事件があった。それは二十年前のことで、警察の到着前に犯人グループは組み伏せられてしまったのだけれど、なんと解決したのは外国人の少女だったらしい。

それがなんなのかって？まさかそれが私だったなんて、思わなかったって話だ。

「あたしね、昔事件に巻き込まれたことがあるのよ」

ママは時々話してくれた。拳銃を持った凶悪犯に人質にされ、危うく殺されるところだったと。

「その時にね、助けてくれた人がいるの。命の恩人。それも二人よ？」

犯罪に巻き込まれたというのに、ママはそのときのことを楽しそうに話す。嬉しそうに話す。

恩人の写真をママは撮っておいたそうで、私は見たかったけれど、ママはいつも写真を見せてはくれない。

「あたしがそーなったら、紗枝ちゃんも助けてくれるでしょ？」

「うん、助けると思うけど……」

「あたしはどうかない。紗枝ちゃん、助けるかなー」

「えー。助けてよね」

そんなこと言っても、ママなら命に代えても私を助けてくれる。ママは自分の命よりも、私の命が大事なんだと、常々言っている。私も同じだ。

ママの方が、私より大事だ。

ママは銀行強盗が逃走用に車を乗り換えるところに出くわし、バッグに詰めたお金を、別のバッグに移すところまで見てしまい捕ら

えられた。そして今頃、廃工場の中で拳銃を向けられ、死んでしま
うかもしれないことになっているのだろう。

しかしまさか、ママの恩人の一人目が私だとは、思ってもみなか
った。話を聞かされ、ママを助けたその人に、感謝をしなければな
らないなあと思っていたのに……。

それがまさか私だなんて！

廃工場に立てこもった犯人たちは、外国人の少女に組み伏せられ
た。

金髪で碧眼の、小柄な少女に。

どこにそんな子が？

鏡があつたなら、私は迷わず鏡の向こうに指を差す。

この子だ！

金髪で、碧眼で、小柄な……。

変装した私だ。

ママを助けた恩人は、私だったのだ。

廃工場の窓の外。窓の中を覗くと、乱雑に物資が放置された中に、
犯人の一人が目だし帽をかぶって立っている。

『いいかい？君のやることは全部資料に書いてある。言ったとおり
にすれば大丈夫だ。その窓から君は侵入している。そして入った
すぐの資材置き場から樹脂パイプを取って、犯人グループに襲い掛
かっているよっだ』

私はそつと窓を開けた。音を立てないようにそつと、そつと……。

目だし帽一号が余所見をしている隙に、私は滑るように工場に入った。視線を散らすと、言われたとおりにパイプがたくさん置いてある。樹脂製のパイプを一本拾い上げる。1mくらいの長さなのに、結構重い。小さい私の手には持ち辛いし……。

「なにをしてる！」

目だし帽一号が私に気がついた。こっちに銃を向けている！

「銃持ってますよ！」

当たり前のことを私は聞いてしまった。拳銃を持った犯人たちが立てこもったのだから、銃を持っていないほうがおかしい。

「動くなよ？」

目だし帽一号は半身でじりじり近づいてくる。銃口はぼつちり私を狙っていて、目が合いそうになる。

『君は怪我をしていない。大丈夫だ。一人目はヒザの裏と側頭部を殴られてる。ヒザの裏を殴って体勢を崩し、それから側頭部だ』

「やったことないですよ」

『思い切りやって大丈夫。犯人は誰も死んでないよ。もう終わったことだ、大丈夫』

そうだ。これは二十年前に終わったことで、もう結果は出ている。私はけがをしてないし、犯人は死んでないし、ママも生きてる。

「誰か他にいるのか？」

ひそひそ話していた私を不審に思い、目だし帽一号は私のすぐ後ろの、窓の外を覗くように見た。拳銃の狙いが少しだけそれる。

「いやあ！」

数歩の距離を走って詰めて、半身の目だし帽一号の右ヒザの裏を思いっきり叩く。

「うわ！」

ヒザから折れていく目だし帽一号の、左側頭部にとどめの一撃！目だし帽一号は積み重なったコンテナにぶつかり、ずりずり落ちて

動かなくなった。

「死んじゃったかも……」

『気を失っただけだよ。大丈夫さ』

手がぶるぶる震えて、怖いけど、なんだかちよつとスッキリしたような気もする。いやいや、そんなことはない。私は暴力的な人間ではない。

『後二人だね。コンテナの陰にもう一人いるから気をつけて』

「はい」

結城さんに返事を返し、私はそつと音を立てないように動く。心臓がドキドキしている。

カツン、と、足が何かを蹴っ飛ばした。

「あ……」

目だし帽一号の手からこぼれた拳銃が、カラカラと床を滑っていき、積まれたコンテナの隙間の所でちょうど止まった。

ストップタイム・ムービングワールド09

「分解症ですか」

「私の管理不足だ、すまん」

「いいえー、遅かれ早かれですよ」

真っ白な部屋の中、ベッドで半身を起こして葵は言った。

浦沢は済まなそうな顔をしているが、まさに葵の言うとおり、遅かれ早かれこうなっていたのだろう。

もしも無事に一年間の復職を勤め終えたとして、再び葵が時間管理局に協力することがあるかもしれないのだ。

「でも、とうとう来ちゃいましたかー」

葵は左手首の、非時間性アームバンドを見つめた。これは通常時間に体を近づけるためのもので、異時間に耐性のない人間が、異時間に行ったときに身につけるものだ。葵は今通常時間と異時間との間で揺れている最中なので、このバンドで少しでも体を通常時間に近づけている。

「まさかあたしがこれをつけるとは思いませんでしたよ」

葵は左手を持ち上げ、バンドを浦沢に見せた。トラベラーは異時間に耐性があるので、非時間性アームバンドをつける機会は少ないましてやここは通常時間だから、かなり珍しいことである。少しでも発症を遅らせるための手段だ。

「案外君は、全部わかっていたような気もするがな」

浦沢は笑って言った。

伊原葵と言う人は、自分勝手でわがままで奔放で、だけど人をひきつける魅力を持っていて、そして計り知れない人だ。もしかして全てを見通しているのではないかと、浦沢は時々思うのだ。

「紗枝さんは、おもちゃが無くなっていいと言っていた」

「あー、言いますよねー、あの子そいうこと。でも知ってます？

局長」

「何をだ？」

「お仕事から帰ると、ご飯が豪華なんですよ。ああ！思い出すだけでよだれがあふれそう！病院食は美味しくないんですよ！紗枝ちゃん呼んでくださいよ！」

無茶を言い出す人である。

紗枝は今まさに葵を救う旅に出ているのであり、よしんばここに居たとしても病院が入院患者に栄養士が計算していない献立を出すことは無い。紗枝ならきっちりカロリーコントロールされた食事を出しそうだけど。

「帰ったら連れてこよう。今後は君が、美味しい食事を出してやれ」

「お電話一本で届くやつですね？」

「……作ってやりなさい」

浦沢はあきれ果てた。しかしその反面で、きっと手料理を娘に作ってやるのだらうと、浦沢は思っている。葵は口で言うことと行動が必ずしも一致しない人だ。

ちなみに葵はやらないだけで、結構美味しい料理を作る。出来ないと思っていた人は大いに反省するように。

「私はそろそろ帰ろう。君も休みなさい」

「おつかれさまですー」

浦沢は立ち上がり、病室のドアに手をかけて、そこで葵に振り返った。

「おおそうだ。君が寝ている間に、旦那さんから電話があったぞ。心配はないと伝えておいた」

「ちょ！何で起こしてくれなかったんです！」

「病人は少しでも体を休めるべきだからな」

笑い声を残し、浦沢は病室を出て行った。

「局長バーカ！」

浦沢の出た行ったドアをにらみ、葵は罵詈雑言を投げつけた。いやだから、相手はあなたの上司なのだけど……。

陽が傾いていく。窓から西日が差し込んで、白い部屋が朱色に染まった。

ベッド脇の棚の上のバッグから、葵は古めかしい携帯電話を取り出した。二つ折りのそれを開き、液晶画面に目を落とす。

「頑張つて、紗枝ちゃん」

優しい音が静かに現れ、そして消えていく。

娘にかけた母の愛は、二十年の歳月を乗り越えて届く。

ストップタイム・ムービングワールド10

「なんだ？」

コンテナの陰に隠れていた目だし帽をかぶった男は、何か物音を聞いた気がしてそちらの方に足を向けた。コンテナの切れ目まで行くと、一丁の拳銃がそこには落ちている。男はしゃがみ、それを拾おうとした。

その時。

「やつ！」

振り下ろされた樹脂製のパイプが後頭部を殴打し、

「うぐ！」

男はその場に倒れ伏す。

『どうしたの？』

「目だし帽二号です。向こうから来ちゃったので殴っちゃいました」
『どこを？』

「後頭部です。大丈夫でした？」

「ちよつと待って……うん、大丈夫。後頭部を二回、だ」

「えい！」

パカン！

紗枝の振り下ろした二発目が、二号の頭にヒットする。

『なにしたの？』

「まだ一回でしたから」

『ああ……』

歴史を変えるわけにはいかない。二回殴られたのに、一回で済ますわけにはいかない。

『三号は入り口近くにいます。そこからだと奥つてことになるかな』
既に犯人グループは番号で名前を割り振られていた。犯罪者とはいえ、人権侵害で訴えるべきである。

紗枝は両手でパイプを握り締め、資材の影に身を隠しながらそつ

と移動した。

廃工場の入り口は、ちょっとした広間になっていた。大きな機械でもおいてあったのだろうか？がらんとしている。

「ママ……」

紗枝は小声で呟いた。葵はパイプ椅子にグルグルに縛られ、口に布を噛まされていた。三号が入り口を見張る為だろう、葵は入り口に背を向けて座らされており、三号は葵に銃を向けたまま入り口と葵を交互に見張っている。

「三号がいました。こっちには背を向けてます」

『低い姿勢で思い切り体当たりだ』

「三号は銃でママを狙ってますよ？」

『大丈夫だよ。いいかい？葵さんも君も、この一件で怪我はしてないんだ。もう結果は出てるんだよ』

紗枝には「今」だが結城には「過去」だ。結城の手元の資料に、葵を救出した人間が怪我をしたことは書いてない。外国人少女はその後消息不明となっているが、彼女の血痕は残されていなかったのだ。

『思い切り行くんだ。三号は倒れた時に頭を打って気絶する。大丈夫、二人とも怪我をしてないよ』

紗枝はパイプを床に置いた。その時葵がこちらに気がつき、紗枝と目が合う。紗枝は手で「ちょっと待っててね」と合図を出した。葵は何事もなかったように視線を外す。

「くそ！まだか！どうなってやがる！」

三号はいらだたしげに地団駄を踏んだ。葵はその様子を「ざまあ無いわね」とでも言いたそうな目で見ている。余裕しゃくしゃくで、少しは怖がってもらいたいものだ。

「なんか言ってますけど……」

『あと一人犯人がいるんだよ。葵さんに逃走車両を見られてるからね、車をもう一台、調達しに行ってるんだ』

「四号もいるんだ……。じゃあ戻ってくる前に何とかしないと……」

『大丈夫、四号は戻らないよ』

「え？」

『一号と二号のところに金はなかっただろ？三号の周りを見てごらん』

紗枝は物陰からそつと広間を見た。どこにもそれらしいものは無い。

『四号は金を持って行ったんだ。リーダー各だったかららしいけど、それで戻るわけが無いだろ？彼らは出し抜かれたんだよ』

「そうですか……」

少し乗り出して様子を見ていた紗枝は、また陰に隠れる。三号は葵と入り口に執心で、背後の様子には気がついていないようだ。

しかし手にした銃の狙いは葵から外れず、紗枝は少しでも葵から狙いが外れれば飛び込もうと思っっているのだが、なかなかそれが出ない。

紗枝には何もできない中、一秒が一分、一分が一時間にも感じられるような濃密な時間が過ぎてゆく。

三人が三人とも、じりじりと焦れていく中で、一番に動いたのは葵だった。

目だし帽三号が葵ではなく入り口の方に視線をやった一瞬。縛られた葵は不自由な手で、手首のスナップだけで何かを投げた。犯人の死角を利用し、目の前で堂々と思い切った行動に出た。

投げられた何かは床にカツンと当たり、

「誰だ！」

緊張感の中で神経質になっていた犯人は思わずそちらに銃を向けた。

瞬間――

物陰から紗枝は地面を蹴ってとび出した。

三号までの距離は10mほど。

「くそっ」

三号が紗枝に気付き、握った銃を紗枝に向ける。引き金に手をかけ、振り絞り……。

発砲の瞬間、葵は思い切り三号の足を踏みつけた。

「ぐあー！」

パン！

破裂音が鳴り、弾丸が発射される。

足を踏まれた痛みに狙いが逸れ、弾丸は紗枝の顔近くを掠めて背後のコンテナ群に着弾した。

「うわああああ！」

背の低い紗枝の、重心を低くしたタックルが三号に直撃する。三号はヒザを支点にしてぐると勢いをつけて倒れ、後頭部をしたたかに打ち付けた。白目をむいて、動かなくなる。

「死んじゃ……」

「つてない、大丈夫」

身を起こした紗枝がうろたえたと、すかさず結城がフォローを入れた。

ストップタイム・ムービングワールド11

「あー、痛かった!」

グルグル撒きに縛られてた葵は、縛られていた箇所を手でさすった。学校指定のセーターに隠れているが、きっと肌は赤くなってしまっているだろう。

「大丈夫?」

「私は大丈夫。あんた血いでてるよ」

葵はちよんちよんと、頬を指して紗枝に示した。紗枝が左頬を手の甲で拭くと、なるほど、そこには血がついている。どうやらギリギリで当たらなかった銃弾は、本当はちよつとだけ当たっていたらしい。

「ホントだ。私は怪我しないって言いましたよね?」

『……怪我のうちに入らないよ』

実際は資料には「他者の血痕なし」としか書いてないので、実は怪我をしなかったとは限らなかった。結城が血痕がないことで、怪我をしなかったと思ったただけだ。

「ありがとね、あんた、やっぱり悪いやつじゃなかったね」

葵は言って、変装した紗枝の金色の髪を撫で回した。

と、外からサイレンの音が。

「誰か通報したんだ。助けてもらう必要なかったかもね」

『君はこの時代の人間じゃない。逃げないと』

結城は言った。捕まって根掘り葉掘り聞かれ、この時代の人間でないバレればやはり歴史が変わってしまう。資料には外国人少女は「その後消息不明」となっていて、つまり逃げたのはそういうことなのだ。

「ごめんなさい。行かないと」

「どうしたの?なんか問題?」

「いや、あの…実は正体がバレるとためなの」

「そうなんだ……あ、名前聞いたりするのもダメ？知りたいんだけど」

「え、エリカ・フォンティーヌです」

紗枝は結城に与えられたたコードネームを名乗った。なんだこの名前。どこの国の名前だ。

「うそ。上手く化けてるけど、アンタ日本人でしょ？本名は？」

「それは……」

「言えないか」

ふむ、と葵は小さく息をつく。深く詮索するつもりは無いようだった。

サイレンの音がだんだんと近くなる。

『早く逃げなさい』

結城に言われ、

「じゃあこれで」

紗枝がきびすを返そうとすると、

「あ、そだ、薬。飲んだげようと思ったんだけど、貰ったヤツさっき投げちゃってさ」

葵がそれを引き止めた。

「貰ったやつ？」

「一個持つといたんだけどね」

そう、犯人の気を引くために投げたものは、受け取ったものの捨てずにとっておいた時間固定化剤だ。本来の用途とは違うところで、薬は葵を助けていた。

紗枝はポケットからアルミフィルムに包まれたカプセル薬を取り、葵に渡した。

葵はカプセル薬を口に放り込み、飲み込んだ。

「うえ、お水なしで飲むもんじゃないね、こんなの」

苦笑いで口をあける。口の中には何も残されておらず、葵は時間

固定化剤を確かに飲んだ。

「あの……よかったの？」

「ま、お礼みたいなものかな。悪いもんじゃないんでしょ？」

「うん、それは保証する」

「それにさ、代わりに……」

葵は携帯電話を取り出し――

「内緒にしとくから、写真だけね」

いたずらっぽく笑い、内蔵カメラのシャッターを押した。

パシャリ。

ストップタイム・ムービングワールド 終

私の初仕事はこんな感じで終わった。

そう、初仕事。

私は結局、時間管理局でお世話になることに決めたのだ。

理由は上手く説明できないけれど、なんだか達成感があったし、充実したものがそこにはあったからだ。

結城さんも無事に調停指揮官に登用され、私たちは正式にコンビを組むことになった。

帰還直後、ママは顔に白い布を載せ、胸の上で手を組むという心臓に悪い冗談をやってきたけど、数日してもとの通り元気になった。まだ検査があるとかで入院しているし、もうトラベル能力はなくなってしまうたけれど。

そして私は、初めてママの命の恩人の、写真を見た。

金髪で、青い目で、突然のシャッターに驚いた顔をしていて……。

「一人目の恩人、エリカちゃん」

笑いながら、ママは言った。

それはやっぱり変装した私だった。

「そして二人目」

ママは私に鏡を向ける。

私の顔が、当然そこに映る。

ママはわかっていたのだ。

わかっていて、約束どおり二十年間黙っていてくれたのだ。

「ごめんね、教えてあげられなくて」

いつごろから、恩人が自分の娘だとママは気付いていたのだろうか？

私は生まれる前から、ママと深いつながりがあったのである。

それから、後から聞いたのだけど、四号もちゃんと捕まったそうだし、一人だけお金を持って逃げたから、仲間達が取調べで次々と口を割ったそうだし。

悪いことも、裏切りも、私はやってはいけないと思う。

パパは結局予定が変わってしまい、海外出張から帰ってくる事が出来なかった。ママはそれを聞いて「帰らないならあたしから行つてやる」と息巻いて、旅券をゲットしてしまった。トラベラーでなくなり、時間調停者の肩書きを失っても、ママはいつてもパワフルだ。

ママのタイムトラベルのお話は、これで終わり。

私の話に続くんじゃないかって？

どうかな、それはわからない。

私が母親になり、ママのような伝説の時間調停者になれば、その時は話してもいいかなと思う。

ママの誕生日パーティーは、盛大に行われた。

パパの写真が飾ってあって、遺影みたいだったのがちょっと残念

だけど、みんな凄く楽しんでくれた。

パーティーのメニューで、私しか食べることが許されなかったのは、ママの特性ハンバーグ。ママの料理、美味しいんだよ。知らないだろうけど。

三十八歳。井原葵は、今日も元気です。

ストップタイム・ムービングワールド 終（後書き）

読んでくださった皆様サンキューベイベ。

タイムトラベルママ、完結です。

いかがでしたですか？

面白かった？

少しでも面白かったと思ってもらえていれば幸いですねえ。

割かし好きなお話で、お気に入りなんですけど、良かれと思ってやったことが裏目に出てて少し残念でもあります。

そのへんは、加筆修正でもやろうかなと。

永遠に未完成ということで、一つ。

まあ、お話が変わることはないんですけどね。

長い間の連載で、つっても一年くらいなんですけど、お付き合いくださったかたがたには感謝申し上げます。

よろしければ、次はR u R i - i R oでお楽しみください。

神出鬼没な井原葵のことなので、どこかでまたひょっこりと顔を出すこともあるかもしれませんが、ひとまずはお別れということでは…。

重ね重ねになりますが、ご愛読ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6180f/>

タイムトラベルママ

2010年10月8日13時30分発行